

日本醫史學雜誌

第12卷 第2号

昭和41年4月1日發行

原 著

わが外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響(3)……阿知波五郎……(2)

蘭館医デ・ホウトの死について……………大島蘭三郎……(66)

会 告

例 会 記 事……………(71)

通 卷 第 1364 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2～1

順天堂大学医学部医史学教授室内

振替口座・東京15250番

動脈硬化治療剤

抗キニン剤

健保新採用

薬価基準1錠 ¥52:00

アンヂニン

2,6-ピリジンジメタノール ビス(N-メチルカルバメート)

ANGININ

アンヂニンは、動脈硬化を治すことが実験的に証明された、世界で初めての薬物で、粥状動脈硬化部より粥状物を吸収治療に向わせます。

また、抗キニン剤として強い抗炎症作用の他、ユニークかつ強力な出血阻止作用と血栓予防作用を一剤に具える独創的新製品です。

適応症

1. 次の疾患に伴う狭心症症状
冠動脈硬化症、心筋硬塞、冠不全
2. リウマチ熱、慢性関節リウマチ
3. 脳血栓

包装

アンヂニン錠 1錠 250mg 20錠 100錠



製造発売元

万有製薬株式会社

第17回日本医学会総会 会員募集（第1次公告）

期 間 昭和42年4月1・2・3日（うち3月30・31日、4月4・5日は分科会）

開 催 地 名古屋市

総会内容 学術集会 総会講演（日本人 57題 外国人 15題）

シンポジウム（80題）

その他 学術展示、医療機械医薬品展示、図書展示、公開展示
医学映画映写など

日 程 4月1日 開会式（午前）学術集会（午後）

2日 学術集会

3日 学術集会 閉会式

学術展示会、その他の展示会などの催物は3月30日から4月5日まで

入会方法 所定の振替口座用紙（第17回日本医学会総会入会申込書）にご記入のう
え総会事務局宛お申し込みください。会費振り込みと同時におり返し会
員証及び資料引換券をお送りいたします。

▲会費 会員 2,000円 家族会員 500円

▲第17回日本医学会総会誌 定価 1,500円（昭和42年12月発行予定）
入会申込書の所定の箇所にご記入の上お申し込み下さい。

▲振替口座用紙 日本医師会発行「日医ニュース」添附（教室、医局に
も備えてありますが総会事務局宛所要枚数をご請求くださってもけっ
こうです）

▲申込期日 昭和41年4月1日から

昭和41年12月31日までに申し込まれた方には昭和42年2月中にプログ
ラムを発送します。総会開催時の申し込みは業務の混乱が予想されま
すのでできるだけ昭和41年12月31日までにお申し込みください。

行 事 レクリエーション、観光・見学などの内容については決定次第「風見鳥
ニュース」でお知らせします。宿舎・観光・見学は日本交通公社に申し
込んでいただく予定です。

昭和41年3月

第17回日本医学会総会 会 頭 故 勝 沼 精 藏

副 会 頭 神 田 善 吾

萩 野 柳 太郎

準備委員長 橋 本 義 雄

連絡場所 第17回日本医学会総会事務局

名古屋市昭和区鶴舞町65 名古屋大学医学部内 需話(741)2111(大代表)
4086(直通)

寄贈圖書紹介

古賀十二郎著 「長崎洋学史上巻」 四八〇〇円

長崎学会編 昭和四十一年三月一日発行

長崎文献社（長崎市大黒町十一の一 諸谷ビル）

西洋医療伝来史や長崎開港史など幾多のすぐれた著作を残された古賀十二郎先生の遺著を永島正一、中西啓、明石正彦、嘉村国男などの諸氏が整理して、こんど出版の運びとなったのである。

この上巻に収められたのは語学、天文、本草、洋画、印刷術の五章であり、全部で十章あるというのだから、残りの下巻もなるべく早く発刊されることを切望する。本書の序文にもあるごとく古賀十二郎先生は永く「洋学伝来の地長崎にあって、卓抜な史眼と豊かな語学力を発揮し、貴重な多くの史料を駆使して斯学の研究に前人未踏の境地を拓かれた功績はまことに大きい」のである。その遺稿が後輩たちの尽力によりこういうふうな本として世にでて、学界を益することは喜びにたえない。六〇〇部限定版というので希望者は前記の発行所に早く申し込むがよい。

（小川 鼎三）

原著

わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響（三）

（第六回日本医史学会総会特別講演原著）

阿知波五郎

四、ブルハーヴェ学派の受容

(1) ブールハーヴェ外科

坪井信道訳「蒲爾花歌、萬病治準」から見たライデン学派外科について

⑧ 那共児性機

「治準」(前出)に^①「中世以来諸医相競ヒ、人身形器ノ造質ニ由テ考究探索シ其理ヲ發明シ得ル者甚多シ。然レトモ身具諸器ノ妙用今日ニ至テ尚推知スヘカラサル者、一ニシテ足ラス。恐ラクハ今日ヨリ後、百世ヲ経歴ストイヘトモ、尚推知スルコト能ハサル処ノ者許多ナラン。今時ノ医家好テ新説ヲ誇リ、頻リニ法則ヲ立ント慾スル者、些ノ奇説ヲ得ルトキハ、コレニ由テ百事ヲ概論シ、治術ノ常法ト為サントス。此ニ於テカ、従来ノ論説未タ明ナラサル時ニ於テ強テ妄説ヲ附会シ、学者ヲシテ復タ正理ヲ考究スル事ヲ怠ラシム」この記事に見られるように、ブルハーヴェは当時の系統学派の人々とちがっている「此ニ由テ、コレヲ觀ルトキハ今ノ学者、古人実験ノ説ヲ熟読シ、而後、後世發明ノ新説ヲ採リ、コレト相参照セバ、医術ニ於テ最良ノ基礎ヲ得ヘキナリ」、明らかにブルハーヴェは折衷的系統学派であることを示す。

又、^②「那共児性機、古言ニコレヲネユフスト謂フ。衆人此語ヲ解スル者、真意ヲ得ス。依ト加刺得私人身上ニ於テ、此語ヲ用フル者ハ又、身諸器諸液ト共ニ、本然ノ稟質ヲ具有シ能ク生氣ヲ保持シ、又能ク運動ヲシテ輕敏ナラシムル処ノ機能ヲ言フ。此機能ノ損欠スル処無キ者ハ即チ十全ノ健康ナリ。若シ体中平全ノ性質ヲ失フ処有ル時ハ本然ノ機能即チ不足ス。是レ即チ疾病ナリ」、この論理は科学的である。「自然」の表現を求め得ず、那共児^{ナチニール}とした点に意義がある。以下、肉体を独立して全く他覚的に採り、機能と判然と區別する。しかし、全体には、このように自然哲学的である。

⑨ 纖維脆弱病

「治準」の第八冊第一百十九章以下に「創傷総論」がある。ただ信道は外科に興味がなかったものと考えられ、その各

論全部を省略したのは惜しい。

前章で述べたように、身体の「元質」(元実)が体液中にあって、管中を流動する。この思想を圧縮したのが「凝体」となる。ライデン学派は「元質」(元実)は疾病を享けないとするから、流体の疾病は「元質」の変化でなく流体の疾病である。従って凝体の場合は、凝体そのものの疾病である。固体に於ても同様である。この思想から当然、繊維の接合力の牢固でないものによって「繊維脆弱病」が発生する。その原因は三つある——とくに、その一つを食物とする。故に消化と吸収はこれに関係する。その良、不良は繊維構成上、「性機」十全であるか、ないかにかかり合つて重要である。ここに「脆弱病」^④が起る。従つて「治繊維脆弱之法」では終始して、繊維の脆弱となる原因を除去することを主眼とする。例えばブルーハーヴェの著書“De Materia Medica” 1740 (著者蔵)は全巻二七九頁あげて繊維病に関する治療法と処方に終始している。

◎ 関節強拘

以上の思想から骨傷患者の骨傷固定法によつて起る関節強拘を「数旬間、関節ヲ使用スルコト無キタメ、其部ノ靱帶久シク延長セサルユヘニ纖維自ラ引縮シ固定スル者ナリ」とする。飽く迄 iatrophysical な考え方である。

④ 廃用萎縮

廃用萎縮について「論纖維拘強彈力過度病」の章に、諸管の自己収縮力増加し、狭窄を生じた場合「ソノ病増進シ、竟ニ其極ニ至ルトキハ諸管益々拘強シテ、血液ノ力ヲ以テ(血流量)、終ニ、イカヨウニシテモ衝開スル事能ハサルニ至リ」そのために廃用萎縮を引起す。故にその治療法は物理療法的である。

⑤ 捻挫

捻挫の説明も骨之損傷、為骨之折傷脱臼、靱帶之転回張長^⑦であり、脱臼し、又は脱臼に至らんとした骨頭の「転シテ至処ノ諸管、必ス強圧セラル」。又、「若シ暴ニ関節ヲ施回スル事有ルトキハ骨頭脱臼スルニ至ラスト雖モコレヲ繁束セル靱帶必ス転回シ」捻挫の症を来すとする。

① 外力による圧迫によって起る疾病

「為急引抽長脉管者或由瘍腫、或由一部失本位、強圧他部、或由他物之引力」これにスウィーテンは註して、「罪ヲ犯ス者、訟庭ニ於テ身ヲ高木ニ懸ケテ鞫問セラルルトキ、其翌日諸部疼痛、焮衝ノ赤色ヲ呈ス。是レ脉管抽長セラレ、管長閉塞セル明徴ナリ」としている。

② 焮衝論

焮衝（炎症）論、^⑩「若シ赤血、至細ノ管中ニ壅塞シ劇シキ血勢ヲ以テ後エ、ヨリ頻リニ衝撞セラルル時ハ則チコレヲ焮衝ト謂フ。故ニ……焮衝一タヒ発スルトキハ此二次ニ発スル諸管頗フル多シ。若シ其壅塞セル細管機活ノ運動ニ由テ其中ニ冒入セル粗液ト相摩蕩シ破裂シ、変シ一個白色粘液ノ液トナルトキハ則チ潰瘍ト為ル」そして全身発熱の説明として「血ノ球々相摩シ、又管ト血ト相激スル事愈々甚シキトキハ則チ發熱ス」（第百一章、註）飽く迄 iatropysical である。

このように脉管と血球との摩擦によって焮衝（炎症）が起る思想から、当然脉管の閉塞が取り上げられる。即ち脉管側からいえば収縮（第百十三章）、血球側からいばえ「分子失球形」（血球が尖鋭となつて「相摩蕩」して管末に行けば「磨瑳」する。このように閉塞をも物理的に結論している。しかし、烏蘭圃（ウラング）、や「酒精」を使って血の凝結をはかることもありうる。これは血液中の沕乙（ウエイ）^{血清}の凝結によって止血の目的を達する——つまり、「ギプス」、獣骨の焼燬せるもの、「結鹿土様ノ諸土烈火ニテ燬過セル者」が吸液物であり、従つて止血の目的にそうとした。

③ 「感染論」

第六十章（第四冊）以下に^⑪「論自性酸敗液病」、^⑫「論自性腐敗病」等多分に iatrochemical な病理觀をも含み、有名な消化の生理が詳細に述べられ^⑬「腐敗也者血之變質」とした。従つて腐敗病は主に消化器病の治療を以て実施している。そしてこの腐敗の思想の中には現在の感染を包含している。

④ 刺絡論

以上の思想から当然、当時繁用された刺絡の理由も出てくる。即ち、「管中血行已増進」すれば「血為之所大圧迫、

血之与潤管相摩」しその結果^⑩「球々相推、共急劇、全身發熱、血失稀液、其質乾燥、熱性而易凝結、又熔崩塩油之質、為稀發醃腐、管根潤開、粗液冒入油管、其究油管壅塞或破裂、或起痙衝」従つて刺絡をするのである。又、他方、前述のように閉塞の思想から「血球ハ絶エズ心臟ト動脈トニ由テ圧迫、摩蕩セラレ、其質漸ク稠厚トナル、此故ニ心臟ト動脈ノ機力愈々強健ナル者ハ血液愈々稠厚トナル」から刺絡する。この点を最も明確に説明したのは「刺絡ノ能ク動脈縮張ノ機轉ヲ催進シ閉塞ヲ治スル事實驗ニ由テ甚タ明ナリ。」である。又血球円形ナル理由ヲ顕微鏡で見、細管を進行すれば脉管の広狭種々なるに随い其中を流れる液も亦小大種々であつて血球の大小がこれに應ずる（レベンフークの実験とブルーハーヴェ自家実験の紹介）、従つて刺絡によつて瀉血すれば、その血液長時間放置によつて稀液となり、沕乙（前述）が出来ゐる。さらに鶏卵の軀しないもの、軀するものを顕微鏡によつて觀察し、さらに鶏卵の軀したもの肺臓を觀察して、肺臓の造血機能を助ける事實をマルピギイの実験を引用、自家実験で追試して呼吸生理に触れている。そして、これらは刺絡治療の理論的根拠の基礎づけとしている。又感染、殊に全身感染（敗血症）に触れ、當時は未だ細菌による感染思想がないので「若シ身体ノ内部ニ膿窠隱懸シテ膿汁会聚スルトキハ瘦削ス。コレヲ「ヘッペンイキコールツ」（勞瘵）ト名ク、若シ膿汁久シク内部ニ懸留シテ稀薄醃腐ト為ルトキハ血中ニ混シ更ニ大害ヲ為ス」。即ち、刺絡によつて、その「コールツ」を防ぐ所以でもある。これに關聯して「コールツ」を發する患者膿液を他人に接すれば感染して、その病に罹る。このように細菌の發見はなくとも、感染の思想はあつた。さらに同章に牛痘を例として、その病原體（百私篤（ヘスト）と稱し、信道は「疫」と訳している）は「能ク布絨衣中及ヒ鬆疎ナル木質ノ間に隱匿ヲ人ニ遇フトキハ忽チ伝染シ、此故ニ終ニ大流行蕃息ス」接觸伝染とその伝染経路を明らかにしている。

このように、閉塞が痙衝（炎症）の原因の大きいものであるから、その閉塞と感染防止の方策としても、亦刺絡が繁用された。⑪「刺絡ノ能ク動脈縮張ノ機轉ヲ催進シ閉塞ヲ治スル事、實驗ニ由テ甚タ明ナリ、劇シキ胸脇痛を患フル者、其急痛ニ由テ氣ヲ吸納スル事能ハス俄ニ昏絶スル者アリ、此症速ニ刺絡シ其血ヲ瀉スルトキハ忽チ輕爽ヲ覺ヘ、或ハコレニ由テ疼痛頓ニ休ム者アリ、是レ動脈ノ末梢ニ留滞セル凝血、脉管俄ニ収縮スルニ由テ忽チ広闊ノ処ニ返射セララル者ナリ」

この記事はレベンフックとマルビギイの顕微鏡による検索に影響を受けた点が多いと想像される。このように物理的（イ
アトロフィジカル）考察の結果、当然の帰趨として刺絡を始めとする一連の物理療法が行れたことは前述した。即ち「氣
慰」「吸角」「接蹻」「角法」「発泡膏」の類である。

① 「腫瘍論」

当時、腫瘍の病理をいかに扱ったか。

当時にあつては前述の閉塞の病理思想が根本をなしている。即ち、腫瘍は脉管圧迫の結果、閉塞を来し、そのために生
ずる——「腺ノ腫脹シテ次テ硬結スル者アリ、故ニ其腺ニ循行セル脉管及其近圍ノ部分必ス圧迫セラル此故ニ頑硬腫ノ巨
大ナル者ハ近圍ノ脉管破裂出血スル者多シ」この頑硬腫変して癌腫と為る時は「其性最モ惡厲ニシテ腫脹愈々増加シ、諸
患愈々蜂起ス」とし、先哲「カレニユス」(Galenus)の説を採つて腫瘍を「オントステーキニフ」(癌衝)、「クヌースト
ゲツウェル」(無瘤腫)、「シユクトゲスウェル」(無瘤軟瘤)とし、さらにブルーハーヴェは良性腫瘍は「癭瘤」とし、
その外觀によつて「琶布瘤」、「密瘤」、「脂瘤」、「水瘍」(葡萄状腫瘍)、「動脉瘤」、「静脉瘤」、「角腫」(この中には
梅毒性の「シケウルボイク」を含む)、「骨腫」、「粘液腫」、「結石」、「膀胱様肉」(外力の圧迫によつて起るとし、そ
の証明として、初生児には体中「膀胱肉ナシ」と称している)「モルゲズウェル」(頭髮汗腺の閉塞による)等として
いる。特異とする点は「結石」をこの章に含めている点、良性悪性の区別をはっきりしている点であり、動、静脉瘤や肝
臓腫から良性腫瘍を閉塞の思想に帰一せしめたのも、当時の病理思想としては当然のことであろう。

② 創傷の定義

② 「創傷ヲ論セントスル者ハ必ス先ツ閉塞ヲ論セサル可カラサルナリ」と称して、創傷の定義は纖維の離折であるとし、
纖維の離折は当然「管中ノ液、既ニ漏泄スル」そして漏泄した液は自性によつて変敗する(感染の思想)そして創口が閉
合する。創傷の治癒機転を閉塞思想で説明している。

① 神経損傷

以上の閉塞思想に關聯して是非触れなければならないのは、刺戟伝導を靈液の循環によって説明している点である。
③「神経ノ管形ハ最モ微細ニシテ人知ノ能ク思議スヘキ所ニ非ス、然レトモ腦ヨリ出テ全身諸筋ニ普達シ意ニ從テ能ク諸筋ヲ運動シ、又全身ノ触覚器モ神経ノ機能ニ由テ能ク諸物ヲ觸覚シ、精神ノ府ニ達シ精神ヲシテ諸般ノ意思ヲ起サシム。是レ神経ノ質最モ微細ニシテ人知ノ能ク思議スヘキ所ニ非スト雖モ、其能ク靈液を通輪ス。此奇異ノ運営ヲ為ス事知ルヘシ」從つて神経管が焮衝（炎症）を受け、腫脹することによって、靈液の閉塞が起り、神経の疼痛が起るとしている。然し、外傷に因り、当該神経の切断により麻痺が起ることを認め、その治療の困難な起載がある（第八冊第一百五十四章に N. ulnaris の切断により季指と無名指の麻痺の起る症例を掲ぐ）。

④ 創傷の分類

このように、創傷は纖維説を基盤として、その離折とするも、外傷の種類によって、軟部^④切創と硬固なる部の外傷、即ち「骨ノ折傷」に区別する。

「人ノ全体ハ一ニ凝、流二体カラ成」っているので、その外傷、離断によって凝、流二体の漏泄が起り、その末梢の「運用廢スル」。故に止血不可能な大きい動脈出血にはやむなく切断の処置に出る。

創には大動脈、心臟損傷のように「必死創」と止血により救命しうる「生創」とがある。生創の主目的は止血にあり、それには非観血法として「緊紮」、観血法として「切断」もしくは脳の場合は「穿顱術」としている。

⑤ 創の治癒

創の治癒機転を述べて、出血——血痂——感染——発哥兒質（発熱）——「コルツ」又は発膿——治癒——遺癍痕であつて、このように創の治癒力良成を「造成スル資料ハ良血ナリ而シテ之ヲ造成スル者ハ造化ナリ」、即ち、自然治癒力を重視する。そして附言して動脈瘤に及び、その病理を「動脈ノ創口漸ク合着シ宛モ癍痕ノ状ヲ為ス然レトモ其質薄弱ニシテ」「血勢ヲ辛シテ压制スル」のみで、膨隆して動脈瘤となるとしている。

⑥ 壊死の病理

壊死の病理、血管切断のみならず、神経の切断によっても壊死^⑧を惹起する。

⑩創の診断

創^⑨の視診、止血して創の観察を十分にすべきを説く（洗創には蒲桃酒、蜂蜜及食塩少許の液でする）簡単な止血には加温焼酒の使用。創の視診に当っては常に該当部の解剖学的關係を考慮すべきを強調する。かかる考慮の視診から当然の結果として、創の安危、予後判定の目的が達せられる。即ち解剖關係の重視によって胸部創と思料されるものから、腹部創をも予想され、又、反面、機能障礙から推して、諸器損傷の有無を類推でき、さらに漏泄する液の性状によって、諸器損傷（例えば胸創に、泡沫を起す液によって肺損傷を、又不潔物漏泄は大腸損傷を、尿の漏泄は、腎、輸尿管、膀胱損傷を、さらに創を直接観察しえないにしても疼痛、嘔逆、痙攣、腫起によって、或は神経を、或は腸を、或は横隔膜などの損傷）を類推できるが如きである。

⑪創の予後判断

創^⑩の予後（逆、決来事^{アラカシメ}）、特に個人の異常體質に触れ、スウィーテンは註に、内転逆転の解屍例を挙げてゐる。そして

て創の処置に当っては、肉体の形質上の治癒のみを目的とせず、常に機能の恢復を企図すべきを強調している。

以上、「治準」の第八冊、創傷総論（第四百四十五——百六十九章）は、わが蘭学期外科思想の根幹であって、これから杉田錦腸訳「瘍科新選」^⑪布連吉原著、業泄児蘭訳第一（著者著）、や新宮涼庭訳「窮理外科則」^⑫我爾德兒原著、格爾父蘭訳卷一（宗田本）等の当時最も繁用された諸本の源流をなす。

本書（第八冊）の巻頭に掲げられた外科史はハイステルの詳細な外科史「瘍医新書」の巻之一（第二冊目）、と共に貴重なものである。とくに医史の上から「内病ヲ論スル者ハ必ス先ツ外病ヲ論セサル可カラサルナリ」と外科の必要性を論じてゐる。

前述のように軟部の創は多少に拘らず、脉管の切断を伴い、動脈は勿論、沕乙脉、水脉も細断され、諸液の漏泄が必発し、その結果、当該部の機能、運用を廢するという考え方一つにしても、形態と機能を併せて考慮に入れている。止血帶^⑬

の重要性を説くにしても、この考え方の発展によって裏付けしている。

創の経過観察も創の離開、初血、血痂形成、血痂剝離（或は稀液漏出）以上の経過を第一期癒合とし、感染創は「創唇漸生熱発病、腫脹、反縮、創底肉起、殊脂肪膨發、塞創口、速變敗」とし、この際發熱するは「方此時、患者微哥兒^{フエプリス}貴身熱、口渴」、しかし「膿汁既ニ成ル時ハ、哥兒^{フエプリス}貴自ラ休ム」。反対に膿液が多量で静脈末梢に吸収されて、血中に入ると「コールツ」を生ずる。敗血症である。發膿が終ると「淨復」する。顕微鏡で淨復した創底を観察し、多数の「微細ニシテ軟弱ナル管頭次第二抽長」しているさまを把握している。「良成ヲ造成スル資料ハ良血ナリ。而シテ、之ヲ造成スル者ハ造化ナリ」。さらに最後に創の癰痕化に及ぶ。以上は創の経過一つをいかに観察しているかの例である。

以上「治準」に現れた外科は、実学ばかりでなく、その理論づけを特徴としている。飽く迄纖維維説による iatrophysical な思想は全篇を一貫し、感染の中に iatrochemical なものを、さらに臨床態度にヒポクラテス以下の自然哲学的態度を保ち、自然を観察し、自然治癒力を第一義的なものとして押しすすめている。わが外科に与えた影響はゆるがせにできないものがある。

引用文献

- ① 「萬病治準」第一冊、十九丁表
- ② 同書、第一冊、八丁表
- ③ 同書、第二冊、第二章、斯微甸註
- ④ 同書、第二冊、第廿四章、
- ⑤ 同書、第廿八章、註末尾、
- ⑥ 同書、第二冊、第三十一章、
- ⑦ 同書、第六冊、第百一章、

⑧ 同右

⑨ 同書、第六冊、第一百十二章、

⑩ 同書、第六冊、第一百一章註、

⑪ 同右、第一百十三章以下、

⑫ 同右

⑬ 同右、第一百十六章、

⑭ 同右、第一百十七章、

⑮ 同書、第五冊、第六十章、

⑯ 同右、第七十六章、

⑰ 同右、第八十及八十一章、

⑱ 同書、第四冊、第六十四章註、

⑲ 同書、第六冊、第一百一章、

⑳ 同書、第六冊、第一百十六章、

㉑ 同書、第七冊、第一百三十三章、

㉒ 同書、第六冊、第九十三章、

㉓ 同右、第九十四章、

㉔ 同右

㉕ 同右、第九十九章、

㉖ 同右

㉗ 同右、第一百章、

㉘ 同書、第七冊、第一百三十三章註、

- ㉔ 同右、第三百三十四章、
- ㉕ 同書、第六冊、第一百七章（論閉塞病）及第七冊「論閉塞病」
- ㉖ 同書、第六冊、第一百二十二章、
- ㉗ 同右、第一百七章、
- ㉘ 同書、第七冊、第二百二十二章註、
- ㉙ 同右、第四百四十五章、
- ㉚ 同右、第四百五十一章、
- ㉛ 同右、第四百五十八章、
- ㉜ 同右、第四百六十一、百六十二章、
- ㉝ 同右、第四百六十七章、
- ㉞ 同右、第四百六十九章、
- ㉟ 同右、第四百四十五章、
- ㊱ 同右、第四百四十四章、
- ㊲ 同右、第四百五十二章、
- ㊳ 同右、第四百五十八章、

(2) ハイステル外科の受容

㉠ 「瘍医新書」

- (イ) 蘭訳者ユールホルンについて
- 「瘍医新書」はハイステルの“Chirurgie”からの蘭訳“*Heelkundige onderwyzingen enz.*”を重訳したものである。

この蘭訳本は Hendrik Uthoorn. 1692—1749. によって一七四一年に成り、さらに一七六〇年と一七七六年に改版されている。

このユールホルン（恒牒列吉・幽鹿何倫）はこの蘭訳ハイステル本に「於正文下、附註考証、増統論説、以明至理、以發詳解」そして、附録を補い、「試験実効」を記している。従って「瘍医新書」に触れる際には必ず、このユールホルンに触れねばならない。

ユールホルンは生誕地が判然としないが、一六九二年にライデン（?）に生誕、長じて軍医となつて、一七〇九年にはブルッセルに赴き、転じて一時捕えられ、後釈放されてライデンに帰り、一七一三年に外科医として立ち、パリに留学、Duverney の門下として研究し、一七三六年に解剖と外科の教授となつた。「瘍医新書」例言の四丁に「幽鹿何倫者 亞模斯^{スチルダム}の爾^{アム}覃^{アム}之人、而解體及外科之一名哲也」とあるのは、そのためである。

(四) ハイステル外科書について

次に、原著者の Lorenz Heister, 1683—1758 はその大著“Chirurgie”のみで、当時全ヨーロッパを席捲し尽した感がある。初版は一七一八年でニュールンベルク版、次で一七二四年、一七三一年、一七四五年、一七四七年、一七七〇年、一七七九年と版を重ねた。岡山市立図書館蔵、高橋本の“Chirurgie”は再版（一七二四年）である。そしてラテン語版の *Institutiones chirurgicae*, Leyden, 1739 ところ、Amsterdam 版は一七五〇年である。（Neapel, 1759）

著者は前記、岡山市立図書館蔵（高橋本）のドイツ語版と、著者蔵のラテン語版（一七三九年）とを基とし、京大本のウールホルン訳の蘭訳本（一七四一）を参考とした。

次に原著者ハイステルに触れなければならない。Viktor Fossel の“*Struiden zur Geschichte der Medizin*” Stuttgart 1909 (S. 111 以下)が唯一のハイステル研究書であり、幸い、これを入手しえたので、伝記的なことは主として、この本に拠った。

(五) ハイステル

別表第十のハイステル年表が示すように、ハイステルは屍体について最初^①の虫垂炎を記載（一七一）、Jugular sinus

Lorenz Heister 年表 (Institutiones Chirurgicae序文 Compendium) 表第十
(Anatomicum 及び Bishopト Fossel ノ著書カラ)

年 代	事 項	参 考 事 項
1683	9月19日 ドイツ Fraukfurt a.M. ニ生誕	嵐山甫安「蕃国治方類聚」1691
1702	医学修業ノ為メ Giessen, Möller 教授 解剖ハ Barthold 教授	Newton万有引力発見, Sydenham 歿 1701 嵐山甫斎, 外科薬品効能和解 1695 阿蘭陀外科指南
1756	Amsterdam ニ於テBoerhaave, Ruysch, Rau, Verduyns, Vallants, Bordel, Cone- rdig 等ノ教ヲ受ク	1702 Blancaard 歿 1705 Brisseau 白内障ノ病理発見 1706 檜林鎮山「紅夷外科宗伝」 Morgagni 解剖書ヲ著ス
1707	軍医ヲ志願, 英, 和蘭野戦病院 (Brabant) ニ勤務, 冬 Palfynニ。秋ハ Leiden ニ赴 キ Albinus及ビ Bidloo 及ビ Boerhaaveノ 講筵ニ列ス	
1708	和蘭 Hardewyk 大学ニテ学位受領	
1709	Ruysch ノ推挙ニヨリ軍医トシテ和蘭ニ 従 軍5000人以上ノ傷者治療, 又多数ノ解剖実	「西洋紀聞」
1710	施英国ニ留学, London, Oxford及び Camb- -ridge ニ学ブ	
1710	Altdorf ニ歸リ解剖及外科学教授	
1711	屍体ニツキ最初ニ虫垂炎ヲ発見	1711 檜林鎮山歿
1716	論文 de Cataracta in lente cryst	1713 吉田自庵歿
1717	Compendium Anatomica 出版	
1719	Institutiones Chirurgicae 出版	
1721	英語訳 Comp. of Anatomy, フランス訳 l'Anatomie d'Heister	1721 Palfyn 産科鉗子 栗崎正羽「栗崎流金瘡秘訣」「金 瘡師語録」
1722	Petri DionisノChirurgia, ノドイツ訳出版	1735 西玄哲「金瘡跌撲治療之書」 1737 西玄哲「金創自得」
1758	75才ノ老軀ヲサゲテ往診中 4月18日歿 HelmstädtノSt. Stephans Kirchhofニ葬 ル	

の Diverticum と胆嚢頭部の瓣の記載及び白内障手術の普及によって医学史に残る仕事をしたが、その仕事よりもむしろ前記“Chirurgie”や“^①Compendium Anatomicum”などの著述で有名である。従って外科史には不朽の名を残したが、一般医学史書には、英米系の本には記載しない本が多い（Singer Ackerknecht, Schwalbe などの小冊本にはない。これはハイステルの医学史上の比重を知ることができる。又名医の逸話集を集めた Wilms, Hollander の本には見当らず、Sigerist や Lambert の名医伝にも載っていない）。

しかし、わが国の医学史上の意義は全くこれと相違し、非常に重大である。従って、わが蘭学期には多くのハイステル像が流布した。（著者の調査によるとハイステル像は全部で四種類ある。即ち I. G. Wolfgang 及 Johann Kenckel 及 Georg Daniel Heumann として M. W. Fröling の四人の作によったものである。“Institutiones”の第一巻の巻頭には、このウオルフガングの作の肖像が載っている。わが国に流布した像は第一に越村德基の初版本の「瘍科精選図解」（文政庚辰新春一八一九）（茅原本）の像である。この研究は西村貞氏が先年発表された。次には「フアン、ダイキ、樊泥龜こと北山寒巖筆のハイステル像で、これは津市の茅原元一郎氏の架蔵である。その他、神戸の市立美術館にもある、その他、新村出氏蔵がある）。

ハイステルの伝記の中で特徴とすべきは、勿論当時名声並びないブルハーヴェの講筵に列したが、むしろアムステルダムに在った Hendrik Ruyseh, 1671—? 及 Johannes Jacobus Rau, 1668—1719 に就いたことである。解剖と外科はこの二人からの影響が最も大きい。ハイステルは蒐集狂であった。その書庫には当時一二〇〇冊以上の文献が揃い、植物、解剖標本は勿論、四七〇種類に上る外科器械を所蔵し、諸国を旅行し、その上、親しく数多い戦傷患者を治療した経験があるので、その“Chirurgie”著述には最適任者であった。従って前記したように版を重ねた（ドイツ語版は七版、ラテン語版英語版は十版、さらに“Compendium Anatomicum”は実に二十五版に及んだ）。

ハイステル本は各外科史が指摘するように、外科学を組織、体系化して、世に問うただけに、最も多く歓迎されたのである。その採用文献も一一九九部の多数に上り、ドイツ外科学界は勿論、従来それまでリーダー・シップをとっていたイ

ギリス外科学界 (William Clowes, Peter Lowe, Richard Wiseman, William Cheselden) で繁用された諸外科書を遙かに凌ぐものであって、その内容はとくに優れている。

ハイステルは江戸系期といわず、すでに、その前に吉雄耕牛も紹介している。そして、杉田玄白も「解体新書」以前に「瘍家大成」(富士川本に拠れば、安永庚子夏五月於武陵司馬写焉、奥州、熊田自恭宗興と後書がある。)にハイステルの挿絵を採っている。すでに知られているように御書物奉行、近藤守重撰の書籍三十一の蘭書四の中に「^①勞冷佐瘍科教導」二冊、原名ラウレンス、ヘイステルス、ヘールコンスデゲ、オンドル、ウエーシンゲン」と出ている。それには「入爾馬泥亜国中ノ、ブロンスウエイキ及リユネンブルグ、ノ會議官兼侍医兼ヘルムスタットノ大学校ノ内外科本草科ノ授拳教導師兼入爾馬泥亜ノ王国ベルレイン及暗入利亜国ノ学会ノ首長ラウレンスヘイステル撰、和蘭国ノ解剖及外科ノ講師入爾馬泥亜ノ王国ベルレインノ格知学会ノ首長和蘭国ノオーフルエイセル及ウトレクトノ地及ハーレム邑ノリットミユス兼亜謨私的爾覃ノ貧院惣管ヘン德里キウールホールン翻譯註解第一刊千七百四十一年(寛保元)年辛酉) 亜謨私的爾覃ニ於テ書肆ヤンスズーンスハンワースベルゲ刊行第二刊千七百五十五年同地ニ於テ書肆ゲルリット、デ、ゴロート及ヤンモルテルレ刊行) 按ニ此書上下卷門ヲ分ツコト十有二卷、首ニ瘍科入門ノ大綱ヲ論說シ随テ創傷総説ヨリ起テ繙帶諸法ニ終リテ通計二百五十篇図尽若干頁毎篇ウルホールンノ註釈評論アリ末ニ同人ノ新造瘍科諸器械ヲ増添ス西洋外科法ヲ説クノ書甚タ多トイヘドモ此書ノ如ク盛ナルモノアラズコレニ亜テ近日並ビ馳スルモノハ即チ左ノ一書ナリ) として「外科新編」三冊有図、原名ヘーデンダークセ、ウーフヘネンデ、ヘールキュンデを挙げている。これは David van Gescher, 1736—1810 の *Heden-dagsche oefenende Heel Kunde* (近代外科実地書) である。この項の説明に和蘭国亜謨私的爾覃ノシントピートルノ病院ノ外科勸督兼ハアレム及ゼーランド中ノフリッシンゲンノ学会及同国ダーヒッド、ハンゲッセル撰、第一卷千八百七十年、第二卷千七百八十二年、第三卷千七百八十六年、亜謨私的爾覃ノ書肆ヤンドルレ刊行としてある。ゲッセルは、「タバコ流腸」(一七九〇)の創作者であり、又「瘍科新選」のブレレキ原著の蘭訳者、業泄兒(後に詳述する)の人で、わが蘭学には最も関係深いオランダ系外科医である。

近藤正斉守重は、近藤正斉年表によれば、文化五年二月晦日書物奉行となり、文政二年二月大阪御弓奉行に転任する迄十一年間、書物奉行にあったのであるから、その蘭書目録は最も早い時期の詳細な蘭書目録として意義がある。その目録に載せられた外科書は当時最も繁用されたものと見做すことができ、前述二書の他に、十二部がある。

その中には「瘍科精選」一冊（原名ニーウクエゲソイフルデヘールコンスト、和蘭国医学ヨハンネスデ、ゴルテル撰、千七百五十一年刊行）や「内外治療精義」（原名、和蘭国ノ医、ステバヌスプランカールツ撰）及び「海上備要方」一冊（原名ゼーシクユルシイ一名マタローセントロースト。和蘭国ゼーランドノ医ヤンコウウエンブルグ撰、千七百六十年「海上備要方外傷門」月池医述第一種、蘭揚可烏聞浦爾弧著撰、文化乙亥新稿、繕生室蔵梓 即ち桂川甫周国瑞の訳解で出版されている）などが含まれている。

目録にも記載されているように、この「勞冷佐瘍科教導」二冊は、「西洋外科法ヲ説クノ書甚タ多トイヘドモ此書ノ如ク盛ナルモノアラズ」と記し、これは当時の率直な書評である。

「蘭学事始」の中に明和四、五年の頃甲比丹のヤン・カランスが江戸に上った時、外科のバブルを師とした幸左衛門（耕牛）が刺絡を行った記事があり、「^⑧滞留中は怠慢なく客館へ往来せしに、幸左衛門一珍書を出し示せり。これは去年初めて持ち渡りしヘイステルのシユルゼインといふ書なりと。われ深く翹望して境樽二十挺を以て交易したりと語れり。これを披き見るに、その書説は一字一行も読むこと能はざれども、その諸図を見るに、和漢の書とはその趣き大いに異にして、図の精妙なるを見ても心地開くべき趣きもあり。よりて暫くその書をかり受け、せめて図ばかりも模し置くべきと、昼夜写しかゝりて、われ在留中にその業を卒へたり。これによりて或は夜をこめて鶏鳴に及びしこともありき」の記事は余りに有名である。この図の模写は、すでに前述した杉田玄白の「瘍家大成」の挿絵（盤水年譜四頁、明和五年戊子、是年前野、杉田客館ニ至り、外科書ヲ借来リテ玄白一夜其図ヲ模写ス）となり、これが華岡青洲に影響し、乳癌手術を敢行せしめた。

ハイステルの著述には外科に関してはその *Bibliotheca* の二十一頁（前述）にあるように二十二部の文献を挙げ、そし

て、外科以外の文献は、同じラテン語版の第一巻、総目録の次に挙げた五十九部の文献がある。その中で、すでに触れたように“Compendium Anatomicum, 1717”の二十五版の版を重ねたのを筆頭に解剖、眼科、婦人科に亘っている。計五十九篇で総計八十一篇となる。

とくに英語版は一七四八年に刊行、“A General System of Surgery”は三巻に分れ、最も広く行れたもので、現在の古書目録にも屢々散見できる。Leo M. Zimmerman と Ilza Veith の最近刊行された“Great Ideas in the History of Surgery,” 1961 にもこの本を底本としてハイステルの章を論じ、その中から、Of Loss of substance in the Intestines & Of Bronchotomy, Laryngotomy, or Tracheotomy の二章を英語版から抜粋している。

ラテン語版の初版は一七三九年であり、アムステルダム版は一七五〇年ある。さらにネアペル版は一七五九年。そして各国語の翻訳はドイツ語版からでなく、このラテン語版からで、スペイン語（一七四八）、ベルギー語（一七四一、及一七五四）、英語版は前述したように一七四八年、フランス語版（一七七〇）である。

さらに本書から抄録して縮刷版とした“Die kleine Chirurgie”これはラテン語版（アムステルダム版、一七四三年）もあり、蘭訳版は一七六四年であり、わが国にも輸入された。

思想的には Georg Ernst Stahl, 1660—1734 の Animismus には徹底して反対であった^⑩。それはブルハヴィエやルイシユの iatromechanical な思想に傾倒していたからである。そして、それはハイステルの解剖学傾倒が、その医学思想の基盤であったからである。著者蔵の“Compendium Anatomicum,” 1748 の巻頭に Viro amplissimo atque doctissimo D. Johanni Baptistae Morgagni として以下モルガーニへの献詞（一七四二）がある。従ってハイステル外科は終始解剖学と表裏一体のものである。

その外科書の研究はフォセルによって尽きているので、ここでは省略する。

(二) 「瘍医新書」の構成

「瘍医新書」の成立については大槻茂質の序と例言に詳しいので省略する。

(i) 首 卷

首巻は前記の序と例言と、総目である。総目については、*nosology* の上から興味があるが、ブレンキは有名な分類学に興味のある人であり、後章のブレンキの項にハイスルと対照考究してみたい。

(ii) 卷之一

卷之一―三は外科誘導の五十四章である。これはドイツ語版(括弧内はラテン語版)の *Einleitung* (Introductio) である。ハイステルが最も力説している点は外科が技巧、手術のみのものでなく、「究理格知ノ本原ニ就テ善ク其淵源スル所ヲ考」を基盤としなければならないことである。究理格知は蘭語の *Wetenschap* の訳語であり、ドイツ語の *Wissenschaft*, ラテン語の *Scientia* である。従ってハイステルの外科は飽く迄医学的外科 *Medicinische Chirurgie* (*Chirurgiam Medicum*) であらねばならないとする。「此ノ真術ヲ羅甸ニ(シリユルルヂア、メヂカ) ト名ツク、和蘭訳ノ(ゲネースキユンヂヂ、ヘールコンスト *geneeskundige heekunst*) ト云フ」。故に外科は「知理学ト技術」を兼ね備えねばならない。当時としては「唯外科ト云ヘル名ノミニシテ世ノ不学無智ノ粗エ(プロッテラール、膏藥売) 或(バットストーフ、ホウデル、俗外科)、或(パールド、シカラップル、侍詔) ナド呼バル、輩、何ニノ意見モ無ク漫リニ外科ノ療術ヲ為シテ大ニ人ヲ誤ル」輩と誤認されてはならぬとし、「彼徒ト同シキ賤技ナリト他ニ誹議セラル、事無ルベシ」とし、解剖学の必要を強調している(第一巻、第一―十六章)。

(iii) 日本最初のヨーロッパ外科史の紹介

外科が外科学として成立する迄の過程を、詳細な外科史によって説いている(第一巻、第七章以下)。この事は当時のわが医界にとっては劃期的な事項で、ここによって、詳細な正統のヨーロッパ医学史に触れることができた。とくに分ト加臘得斯、瓦列奴斯以下の名医の名を適確に記載された点に於て、特記すべきである。例えば歇韌力烏斯、八盧歇応、斯答盧などが紹介されているのは勿論、外科に於ては答技力密革低烏斯、勃崙斯猥疑など五十一名医の紹介があり、全く驚異に値する。

(iv) 解剖学の必要性

解剖学の必要性をさらに強調し、又治術の機械はその症例に応じて撰び、或は「症状ニ依テハ其用ニ便ナル器械ヲモ自ラ製シテ用フベシ。コレ等皆外科ヲ業トスル者ノ一大基本タル「ナリ」(卷之二、第十七章)としてゐる。

又、古語を引用し「(ユシユス、ハシト、アルチヒセム)、是能ク務テ学フ者ハ実ニ其語ノコトク然リ。豈ニ偏ヘニ博洽ノ識者トナランコヲ求メテ唯篤ク書ヲ読ムコヲ勤メ、又精熟ノ外科ノ高論ヲ聞クノミニテ其躬自ラ実施ヲ踏ムコト無クシテ事ヲ済スノ人アラシヤ晨夕只管ニ修練シテ業ヲ礪ミソレヨリ出ルノ学ト術ト兼行ハザレバ至リ難キコト意得ベシ」(卷之二、第十八章)としている。引用文、初頭のラテン語の古語はドイツ語版、ラテン語版によれば“usus facit artificem”である。

卷之三は主として繃帶法とその処置である。最後に「凡ソ医ノ真術ハ時ニ当テ疑念ヲ生シ処分ニ迷惑シテ差誤スルコト無キヲ要スヘシト、式法ヲ立タリ外科ノ術モ亦即其一ニ属ス Die Chirurgie ist auch allergewisseste Theil von der Medicin.」(S. 30)(卷之三、第五十三章)、外科者は正法を鍊熟し、理論に合致した技術を施すべきを説く。

以上はドイツ語版でいえば僅々三〇頁の緒論の克明な翻訳であるが、正統な外科学の全貌を伝え得て、当時のわが外科者に与えたものは非常に大きい。

(b) 内 容

パレの「紅夷外科宗伝」が山脇東洋の「蔵志」に当るならば、ハイステルの外科書は杉田玄白の「解体新書」に該当しその一連の翻訳はヨーロッパ外科の実証方法を、系統立て、解剖学の基盤の上から記述されたもので、わが国外科を覚醒せしめたものである。例えば「紅夷外科宗伝」に理れた外科病名と、ハイステル本の和訳書である「瘍医新書」(一七二四年版ウールホルン蘭訳^{文政八年}一八二五)大槻茂質重訳四冊)の首巻総目二五〇篇の外科病名を比較すれば、*nosology*の上からいかに近代化されたものがわかる。例えば *Paré* の *Opera chirurgica* (1594) には乳癌の記載はないが、*Heister* の *Chirurgie* (1724) には *Das Buch N* (三〇二頁) に十七章「*癌*(*krebs*)」の章がある。これを瘍医新書には、総目の第四腫瘍部とな

ついで、第十七に「癌」とある。又、Anderer Theil der Chirurgie von den Chirurg, Operationen.その第四に胸部の手術の章があり、その第二〇四章に Vom Krebs an der Brust. (六一二頁) があり、「瘍医新書」総目には第一百六章となっていて、「乳癌」と記載されている。そして、その手術図は第十六、十七、十八図に載っている。さらに癌は乳癌のみにとどまらず、Auge (五二七頁)、Brust (六一三頁)、Arm (六一三頁)、Lippe (五五四頁)、Männlich Glied (六八〇頁)、Testiculus (六七四頁)、Zunge (五八四頁) の記載があり、パレ時代と格段の相違がある(蘭書とは頁数の相違のみで、内容略一致、ラテン語版との比較は附表参照)。しかし、ブレンキの外科書はさらに格段の進歩がある(後述)。

当時は前述の通りに、ライプニッツの連続の法則に影響を受け、リンネの植物分類学をはじめ、又、医学の病名分類もそれより前ジデナム以来漸く緒についた時代であり、ハイステルも多分にその影響を受けている。そして、その傾向がそのまま「瘍医新書」に現れている。病名分類の進歩は当該疾病の本態がわからなければ不可能な事であって、この意味からハイステル外科の病名分類の飛躍進歩は、そのまま、外科学の進歩を象徴している。

⑥ ハイステル挿絵の意義

ハイステル外科書には蘭訳本(一七四一年版)、ドイツ語本(一七二四年)には共に、銅版、折量みの二十六図葉があり、ラテン語本(一七三九年)は三十八図葉(ラテン版には図葉の三七と三八は繃帯術の図である)がある。以上の多数の精巧な外科図譜は、これあるがために、ハイステル外科書の声名を挙げえたものともいうる。外科器械、手術材料、繃帯法、副木、義肢、進展器、手術図、等語学の障碍を踏み越えて、一見容易に、手術内容が判明理解し得られる。この一連の挿絵が、わが外科にいかに大きい影響を与えたかは、前述の「瘍家大成」の片々たる「截乳岩図」が、わが華岡青洲外科に通じることを想えば、想い半ばに過ぎるものがあるであろう。このハイステル外科書の挿絵のみを翻刻した伊勢、越邑德基訳「瘍科精選図解」文政庚辰新春発刻一八一九年序文文政巳卯冬十月(茅原本)の外科史的価値は、その意味から高く評価さるべきである。とくに、「瘍医新書」が五十巻の内、総目一卷と初篇四巻のみが刻成ったに過ぎなく、その他の諸篇は一部刊本に他は写本として行れたにしても、遂に一貫して梓行するに至らなかった事実があるのであるから、その重要性は格別であ

る。「瘍科精選図解」の序を書いた尾張藩の儒者、秦世寿は「……士祥又欲輸此書於漢土以広施其術甚矣医之好仁也夫此書發諸大洋放諸東海詎之東海伝之漢土循環轉輸以大成妙用始信地球之為大円矣」と述べている。德基の抱負は非常に大きい。この「図解」の意義を高く評価している証拠でもある。又、德基の序にも、兎角文章は「靴下搔痒以古今通弊也」であるとし、「図解」の意義を強調し、これを発刻した旨を述べている。初版にはハイステル像と切断図の牧墨僊の銅版があり、再版はハイステル像がなく、切断図は銅版でなく、木版画であるところからみて、当時この「図解」が広く行れたことと想像される。

「図解」と各洋書との比較は別表に一括記載した。

とくに輸血法（図解第七葉）は実地に応用されなかったにしても、このアイデアがわが国に最初に紹介された点で興味深い。第七葉の十一図を「通移他人腕血于病人腕状」と訳し、同じ十二図を「前術施手背状」、十三図を「以管通移犢羊及諸獸血于人状」とある。

次に四肢切断術（図解第九、十葉）に於て、当時その動脈処置をいかにしたかが問題となる。パレはこの問題解決のプリオリテートを持つ人として著名であることは前述の通りである。ハイステルはまずスラーグ、アーデルタング（德基はこれを「動脈鑷」と訳している）で結紮している。

さらに意義のあるのは、二回に亘って触れたように、杉田玄白「瘍科大成」の截乳岩之図として著明な乳癌手術（図解第十七、十八葉）である。第十七葉ノ下の第一図には「乳岩ヲ切断スル新製具」を説明し、第十八葉には七図によって乳癌手術法を説明している。華岡青洲の「乳巖治驗録」には「余嘗於紅毛書中有所見、就是思惟数年、神之所感手、聊有所得」とある。文中、紅毛書とは、ハイステル外科書を指し、この第十七、十八葉の挿絵を見たことを指すのであろう。従ってこの点のみから見れば杉田玄白の「瘍家大成」を引用する迄もないことである。

◎ 「瘍医新書刺紹編」

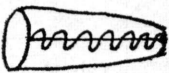
上、中、下、三冊、大槻茂質翻訳
老楞斯協乙斯貼盧外科書（一七二四年版）

④ 「刺絡編」の構成

図 葉	瘍科精選図解 Heelkundige onderwijsin- gen.	Institutiones Chirurgicae	Chirurgie
	D.L. Heister. 伊勢・越邑德基訳・牧墨僊画	D. Lavrentii Heisterii D.L. H.	
	文政庚辰新春1819. (序文文政己卯冬十月)	1739	1724
1	外科器械	Tab. 1	Tab. 1
2	綿綫・小管・膏紙・繃帶法・錦布 (タンボン)	Tab. 2	Tab. 2
3	繃帶使用法・禁血帶・烙鉄・腹創縫合	Tab. 3	Tab. 3
4	○新製禁血帶・繃帶・銜針管・ 水銃・管・胸腹穿孔具 スボイト	Tab. 4 (Tab. 4ハ各種縫合図) 8 葉	Tab. 4
5	穿顱術用具	Tab. 5 止血帶 Ⅶ 図解及ドイツ版ニナシ	Tab. 5
6	整形外科具 (骨支持器・副木類・丁字柱) ○伸展装置 (嚙嗑刀) スネータンク	Tab. 8 Tab. 6 (強剛伸展装置「図解」ドイツ版共ニ欠) (Tab.10.脱臼・索引法・図ド共ニ欠)	
7	刺絡用具・動静脉瘤手術 輸血法 (通移他人腕血于病人腕状)	Tab. 11	Tab. 7
8	烙鉄・○灸足背状・○縫合法 (縫腸法) 縫 欠唇法	Tab. 4	Tab. 8
9	○切断器械・動 脉 鋸 スラタ・アーデル・タンク	Tab. 12. 13 (一部)	Tab. 9
10	穿顱具・眼科 口絵・切断図	Tab. 15	Tab. 10
11	眼科器械 (涙管) 欠唇縫合法	Tab. 16	Tab. 11
12	眼科 (白内障) 眼鏡	Tab. 15. 16	Tab. 12
13	眼科腫瘍	Tab. 18	Tab. 13

ハイステル外科書挿絵の意義 II

表第十一ノ二

14	欠唇縫合 耳科・鼻科 ○唇 瘡 ○(披聲具) (鑷取去鼻痔)	Tab. 19 20	Tab. 14
15	口内手術 ○胃箒 ○斜頸(及其具) ○扁桃腺切除器 ギロチン式(説明欠)	Tab. 21 ギロチンハ Fig 8	Tab. 15
16	鉗子(鑷)○大乳岩状	Instrumentum aliquid ac uvam rescindenda proprium XXII 乳癌	Tab. 16
17	○乳岩(未破潰者状・治後癰痕状・以新製 具切断乳岩状) 切断乳岩新製具→	Tab. 12 13 Tab. 17	Tab. 17
18	○乳岩手術並手術具	Tab. 22	Tab. 18
19	ヘルニヤ(崩下)包茎	Tab. 24 25	Tab. 19
20	○カテーテル(男子・婦人)○碎石・丁字 帶 (疏尿管) (剖石)	Tab. 28	Tab. 20
21	碎石術	Tab. 29	Tab. 21
22	詳未男子努内之尿道 碎石術 婦人膀胱位置 大人剖石状 往時剖石術状	Tab. 29 (腹部 Tab.30ハ図解ドイツ語版共ニ) 欠	Tab. 29
23	産科 胎児位置・鈎取死胎・引頭子	(" 31モ共ニ欠) Tab. 23 (膀胱 32モ共ニ欠)	
24	婦人科 治子宮脱具・浣腸具・ 輸煙管・肛鏡・痔漏手術	Tab. 33	Tab. 24
25	婦人科 器械・アヒレス腱・○大皮行騰 	Tab. 33 (ラテン語版 37, 38ハ綱帯学) (ドイツ語版並図解共ニ欠)	Tab. 25
26	肛門・手腱・小兒脚骨柱衰不正状者	Tab. 36	Tab. 26

Chirurgie/D. L. Heister (1724年版) (1)
Inhalt 享保 9 年

(表第十二)

Erster Theil der Chirurgie	内 容 摘 録	
Einleitung: Von der Chirurgie Beschaffenheit überhaupt. Endzweck 5/Ursprung u. Wachstum. 6/Einteilung 9/Nothigsten. Instrumenten 11/Medikamenten u. Geräthschaft 13/eines Chirurgie *Eigenschaften u. Ampt. 13/Nothwendigkeiten Zum verbindenden. 19/Meissel 20/Pflaster 21/Compressen. 22/Binden. 24/Stricken u. Bändern.	○卵白慣用ノ廃棄 (Graeco-Roman時代) ○激痛ハ神經ノ障礙及異物ノ介入 ○Epilepsieハ氣候風土 ○骨髓神經切斷ニヨル神經麻痺 (Swieten 脊髓疾患性壞疽) ○頭角Cephargia 及ビ Clavus ○尖銳物質ニヨルFistel ○Karies ハ身体機構ノ混乱 ○Sehne離斷ハ縫合	1. 「瘍医新書」 (1724) 大槻茂質 (玄沢) 文政 3 年 首巻 総目 (1825) (通計250編) 第 1 巻 (巻之一) 外科誘導第 1 章—13 章 第 2 巻 (巻之二) 外科誘導第 14 章—32 章 第 3 巻 (巻之三) 外科誘導第 33 章—54 章 此編全部50巻40年間 杉田玄白創業安永之初 玄沢入塾安永7年戊戌 原文抄録前野蘭化ニ請正。 1. 外治使用諸ノ図附説 2. 手術部第 1 刺絡編 (八刺精要) 3. 縛帶術 3. ~ 4 年 (當時玄白訳業及潰瘍部) 就本木蘭阜 (崎港) 1. 外科入學誘導 天明丙午夏 (1786) 仕官 例言六丁「全書逐脱其稿」
Das Buch I /von d. Wunden 1 cap.—16 cap.		
Das Buch II/von den Bein-Brüchen od. Fracturen. 1 cap.—10 cap.	○Gelenk schwamm 切開禁止	
Das Buch III/von den Verrenkungen od. Luxationen. /cap.—12cap	○Kariesハ切除	3 「瘍医新書」脱臼整理 近村勝三文碩記 木村貞昌碩校 大槻茂質玄沢聞
Das Buch IV/von den Geshwulsten 1 cap.—19cap. (17cap. Krebs)		2. 「瘍医新書」腫瘍編 大槻茂質訳 (写本)
Das Buch V/von den Geshwüren 1 cap.—9 cap.		
Anderers Theil der Chirurgie. von den Chirurg. Operationen.	○刺絡デ腦出血予防ニ ○炎症惡感ニ刺絡慣用 (Boerhaave)	4. 「瘍医新書刺絡編」 上中下 1 冊本 文政壬午 (1822) 同一内容のものを改版して次のものがある 「八刺精要」3 巻 3 冊 文政8年乙酉 (1825) 大槻玄沢 (盤水) 佐々木仲沢増訳 大槻先生増訳瘍医新書第 2 部刺絡編
I. Operationes. welche man an vielen Theilen des Leibes verrichten. * 1 cap. } vom Aderlassen. * 2 cap. } * 10 von Verletzung einer Pulsader. * 11 von Verletzung in Aderlassen. * 12 " in Pulsader * 13 Aneurysma. * 14 Infusoria u. Transfusoria * 15 Pocken. * 22 von den Brenn Eisen. * 23 Moxa. * 34 Balglein Geschwulst. * 31 Finger u. Zähnen.	○Aneurysma記載 ○Aneurysmaハ血管ノ Hernia ○神経痛ハ烙鉄使用セス 阿片剤ノ使用 Catatonie, Cholea	巻上 刺絡論第 1 刺肘中法第 2 刺手背法第 3 刺足跗法第 4 刺額上及頸顫法第 5 以下12. 他2章 巻中 巻下 角法 蟬鍼法辛 弁多血質法 刺絡預当弁知 刺禁 器具図解

* 34 Amputationen (Unter u. ober Arm) * 36 Amputationen(UnterShenkel) * 37 Abnehmmy b. Arms. (in den Gelenk d.) (Schulter)	○止血ハ血管結紮ニシクハナイ	「瘍医新書手足切断編」 馬場貞由訳 大槻茂植筆 卷末ニ文化有一稔仲秋日膳 于洛陽宿舎 川口志幹誌 写本(宗田本)
II Operationes welche am Haut verrichtet werden. 38 Fontanel anf d. Kopf od. auf d. Sutura coronalis. * 39 Arteriotomia. * 41 Trepanation. 42 } Augen. 1 } *60 Künstl. Augen 61 } 62 } Ohr. 67 } 68 } Nase. 71 } 72 Hasenschart. * 73 von Krebs an d. Lippen 74 } Zahn. 83 } * 84 } Zunge. (89. Krebs) 89 } 95 Speichel u. Parotide.	○意識障碍ヲ伴フ頭部外傷ハ重篤 (Heisten 及ビBoerhaave) ○脳出血多量ハ手術セザレバ死ヲ脱ルルコトヲエズ ○Epilepsie ニ穿顱ヲ奨ム ○舌癌切除 ○扁桃腺腫瘍切開 ○Parotide 切開	6. 「瘍科精選図解(上下2冊) 越邑德基訳 文政庚辰(3年)(1820)新春 吉雄南阜指導 橋本 元貞 谷沢叔吾協助 牧墨僊銅版画 自序「余所訳定瘍科精選一百卷西海半欽斯苛意的爾所撰也」 7. 「撮要十術」 越邑図南著 卷末「見蘭医苛意私的爾嚙私得兒のメイステル著す書中にあるところにして……」
III Operatones, welche am Hals vorkommen. * 99 Laryngotomia, Bronchotomia (Tracheotomie)	○気管内異物切開排除 ○Brandige Bräune 気管切開	○止血瘡大出血 ○接断骨 ○婦脱臼 ○拔出炮丸 ○分娩難産 ○快通大便閉塞 ○快通小便閉塞 ○婦落下頰 ○縫合欠唇 ○断截六指之術 ○附録
IV Operationes welche an der Brust vorkommen. *104 Vom Krebs an der Brust. *105 Paracentesis d. Brust. *106 Trepanation d. Brustbeins.	○Mamma Krebsハ皮弁切開摘出 ○膿胸穿刺 套管針穿刺 排液法	8. 盤水先生撰 「瘍医新書」腹肚刺穿術 草稿 写 1冊
V Operationes, welche am Unter-leib vorkommen. 108 Nabelschnur. *109 Paracentesis d. Unterleibs. *110 Kaiserschnitt. 111 Nabelbruch *112 Bauchbrüchen *113 Buboccele. Hernia Inguinalis. *114 Hernia curialis. *115 Darmbruch (Scr otum) *116 Epiplocele *117 Sarcoccele. *118 Hydrocele.	○腹創結節縫合 ○嵌頓ヘルニアニ烟草浣腸 ○嵌頓「ヘルニア」ニ人工肛門 ○套管針穿刺	

*121 Darmbruch. 122 Pneumatocele Hernia Ventosa. 123 Kramph Aderbruch. *124 Vom Krebs u. Kalten Band an der Testiculis		歌乙斯の児第20 「葉泉論」宇田川榛齊自筆 写本（天理本） 第1章 葉泉主用 第2章 含有質 第3章 葉泉医治
Am männerlichen Glied. 125 Phimosi. 126 Para Phimosi. *127 Krebs am männerl. Gl. 128 Frenulum Penis. 132 Blase. 133 } Harnrang 134 } *135 Stein schneid. 137 Der Stein am Bauch aus d. Blase zur schneiden. 138 } 139 Punctura Perinaei. 140 Firsteln Perinaei.	○除辜術ノ記載 ○陰囊水腫ハ淋巴液ノ嚢帯 ○Celsau手術 ○痔瘻ニ有溝消息子使用 ○肛門指診（腹膜内腫瘍結石）	10 杉田玄白 「瘍家大成」 安永8年 (1779) Heister図ト一致スルモノ下記5図 1. 刺肘内静脈図 2. 鉄管肛門鏡 3. 男子殺道図 (直腸肛門) 4. 女子殺道図 *5. 戴乳岩之図
An d. Geburts-Gliedern d. Weibes. 141 Lippen d. Scham. *142 Mutterscheide geschlossg. 143 Allzugross Clitoris. 146 Stein.	○Recto vaginal Fistiel ノ開放療法	
Von d. Hebammer-Kunst. *140 * (148. Ausziehung eines tödtten Kinds). 155		瘍医新書鈔訳 「要術知新」3巻 文政6年甲申（1823年） 盤水先生関 大槻玄幹訳
Operationes, welche am Hintern vorkommen. 159 Von Ausfall d. Mastdarms. *163 Fistula ani, Gesäss Fistel.		卷之上 灌腸法篇第1 消息子篇第2 卷之中 痔漏篇第1 肛門膿瘍篇第2 痔核篇第3 痔血篇第4 痔腫瘍 第4 外用諸器具図説増訳シヨ メール
IV Operationes, welche an Hände u. Füßen vorkommen *168 Nath d. Tendoachillis 172 Krummen Bein.		
Dritter Theil Bandagen od. chir. Verbaänden. 1 } Bandage. 8 }		12. 「外科収功」 大槻玄沢訳 大槻玄幹増訳 文政5年（1822年） 13. 「繃帶図式」 文化10年（1813年）

これは外題には「増訳八刺精要」となっている。増訳とは、佐々木知芳の題言に見られる通り、最初に鶴斎杉田玄白がハイステル本の訳業に着手し、次で磐水、大槻茂質が、その後を襲い、遂に「全訳殆成」（現存写本類も略、これを裏書きする）った。とくにこの刺絡編は磐水が蘭化に従学の際、口授を請け、筆録し、「八刺精要」といつていた。十分原稿を補正する暇がなく、「秘之帳中」していたが、いつの間にか人に竊写されて了って、早々世に出て了った。従って磐水は「如救飢人」の気持から、此篇を刻することになった。又他方、佐々木知芳が此篇を訳して、両者を併せて成ったという。

本書はハイステル本の一七二四年版からの翻訳と当時繁用されていた^⑮割墨^{シヨメル}児というまでもなく、Noel Chomel の “Huishoudelijk Worden Boek,” 1768. のこと^⑮で、文化八年三月第十一代將軍徳川家斉の命によって幕府は江戸浅草曆局（天文台内）に蕃書和解御用という洋書翻訳局を設け、これを訳せしめた。刺絡はこの「厚生新編」^⑮医療法方部卷之一刺絡にある。馬場佐十郎訳、大槻玄沢校である。

ハイステル本は表第一にあるように第一卷手術編の第一章が総論で、第二章から第九章までが、刺絡する場所別（つまり八刺）の手法の記載、第十一、十二章は、その副作用である。以上は「瘍医新書刺絡編」の上、中之巻にある。巻下の角法以下はハイステル本の第一巻の第二十二章以下とシヨメルからの補正である。蟻鍼法は水蛭を使用し、当時フランスで乱用され、とくに François Broussais 1772—1838 の奨用によって、フランスでは年間、水蛭の輸入が四十二万匹を下らなかったという。

ハイステル外科書の刺絡の章は前述の通りに、詳細であり、医学機械論の立場にあったハイステルの当然の帰結でありブルハーヴェも亦、乱用を戒めはしたが、これを恐れて実施しない医師を「恐医」^⑮とした。新宮凉庭の「療治瑣言」によると「京師ノ俗補ヲ喜ンデ瀉ヲ惡ム蛇蝎ヨリモ甚シ、況ヤ放血ヲヤ、然レドモ余京ニ住シテ二十五年ノ間ダ放血ニ由テ百中一ヲ誤ラズ、是ヲ以テ近來ハ処シ難カラズ」としている。ゴルテル、プレんキをはじめ、好んでライデン学派の本に親しみ、ブルハーヴェの「万病治準」を講じた凉庭としては当然であつたであらう。

「瘍医新書刺絡編」は一冊本と、文政八年版には三冊本とがある。後者は「八刺精要」となっている。「八刺」、刺絡部位は肘中、手背、足跗、額上及顳顬、内眥、頸側、舌下、陰莖の以上八刺である。陰莖法はハイステルの“Compendium Anatomicum” 1748. の附図Vに図が出ている。

(四) フランクルトの「刺絡篇」

「武蘭加児外科家鑑」巻之二、皇都内外科、藤林紀元淳道訳、刺絡篇、写本一冊（宗田本）

ハイステル外科書より古い Steven Blankart, 1650-1702 からの翻訳であるが、刺絡場所も内眥、陰莖はない。角法と蟻針があるが簡略である。

④ 「瘍医新書・手足切断篇」 西洋ヘーストルシルセン著 東洋馬場貞由訳、大槻茂質筆 写本一冊（宗田本）

ハイステル外科書の第一巻の第三十一章以下第三十七章迄の抄訳である。

ハイステル外科当時は、パレ外科によって、切断肢の血管結紮処置が整い、他方未だ関節外科が十分の進歩を遂げていない時代であったので、四肢切断の最も乱用された時代である。しかし、ハイステルも明言しているように、「夫手足ヲ折スル事、瘍医諸術中ニ於テモ最恐ヘキノ術也、然トモ諸術ヲ尽シ、治セザルトキハ、其命ヲ助ンカ為ナレバ、数度此術ヲ務ルコアリ」即ち *Gum das Leben eines Menschen zu erhalten wo es auf andere Manier nicht kam erhalten werden* (Das XXIV Capital. Von Abnehmung oder Amputation einer Hand/Unter-und Ober-Arms. 第1頁 Wenn diese Operationes nötig) 飽く迄救命手術としてやむを得なかった。この「手足切断篇」は前述のようにドイツ語版の第三十四章（四三二—四三九頁）に当り、次章（第三十五章）の *Von Abnehmung eines Fusses und Schienbeins* は記載されていない。

即ち第三十四章のこの篇は、十四項に分れている。第一項は前述のように飽く迄切断は救命処置であるべきを説き、第二項は手、第三項は腕の切断をいかにすべきかを述べている。とくに必要なのは当時においては「腕、前腕後ヨリ打切シト云ヘトモ其骨碎ケ易シ」この意味が判然としないが、ドイツ語版によると *aber nicht in dem Carpo oder Metacarp*。 *weil sich daselbst die viele kleine Beine und Ligamenta nicht leichtlich seggen lassen, sondern im Anfang der Ellenbogen*

である。訳書はさらに続いて「故ニ今、庸医ハ臂ノ始メヨリ鋸ヲ以断チ去ル也、腕ノ前後ハ夥多ノ微骨或筋有テ断チ易カラス、今手及臂ヲ断、爰ニ記スヲ以テ知ヘシ」となっている。即ち、meta Carpo を「腕ノ前後」、又は「前腕後」としている。又、今、庸医はハイステルを指しているやに想像されるが、今瘍医 (die neuere Chirurg ラテン語版の fecisse chirurgi) で、一般その頃の外科医を指している。即ち恐らく今瘍医が転写される間に誤記されたものと思われる。

第四項は本篇中、最も重要な切断器械の記載である。原文、ラテン語版は二十目、ドイツ語版は十四目に分けて記載している。第一目は止血帯に「トルネケット」Torniquet (「瘍科精選図解」第四葉、第一図、知の転機禁血帯或は新製禁血帯、参照)の使用である。これは螺旋^{スクリュー}を附し、止血の強弱、圧定時間等を自由に加減装着せしめうる。(ラテン語版、

TAB. XV. Fig. 9 にその装着図がある。他書との比較は表第一一参照)

有名な「瘍科精選図解」初版の牧墨僊銅版はドイツ語版や蘭訳版と同じく左上に切断用具の記載があるが、ラテン語版にはこれがない(一般に蘭語版、其他、他国版はラテン語版からの蘭訳とされているが、蘭語版のみは、むしろドイツ語版からの翻訳とすべき点が多い)何れにしても、上肢は前膊中央部から、下肢は下腿中央部からの切断を実施している図が載っている。第四目は Ulna と Radius の間の筋肉を切る(両刃刀)。第五—八目は切断後の創の繃帯材料で、押木綿麻ノホツシと大きい「ボーヒスト」である。この「ボーヒスト」は Bovist で、さらに牛や豚の膀胱と吸付膏薬、押布等が備付繃帯材料である。第九目は止血であるが、小さい出血は止血薬、純度高い酒精、テレベンチン油を使用する。そのために夫々小瓶に入れて用意する。尚不思議なことに、病人に対し「葡萄酒又ハ氣ヲ強ムル酒ヲ飲マシテ是ヲ勤メテ勇氣ニナサシメテ其術ヲ行ヒ始ムベシ」にとどめていることである。果して実地に於て、総論で述べられた鎮痛処置を講じての上の処置だと想像される。

止血は第八項以下である。小なる血管の出血は「動脈ノ切口ニ焼金ヲ当ルナリ」である。大なる血管は「ラーヘンベッキ又ハスラクトルタンクヲ以テ血管ヲ挟ミ、蠟ヲ引タル糸ヲ以テ固ク結フヲ為良」とする。これは「瘍科精選図解」の第九葉第六図の「動脈鋸」である。同図には「此鋸ヲ以テ動脈ノ管端ヲ挟ミ出シ、糸ヲ以テ緊纏シ、薬ヲ貼スル也」とす

る。コッヘル氏鉗子以前の時代に於て、本鐮の価値は重大である。Tab XIV に載っている動脈切断端を鐮で固定している図 (Fig. 4.) は、鐮の把手を紐で固くくくり、コッヘル鉗子の代用としてゐる。尚本篇はこの Compress (forceps) を鐮とせず、「毛引」と訳している。毛引で切断動脈を固定牽引し、その基部を「曲レル針ニ蠟ヲ引キタル糸ヲ通シ動脈ノアル辺傍ノ肉ヲ二刺三刺シ通シテ其糸ノ間ニ動脈ヲ置テ是ヲ以テ肉トモヲ締ムルモアリ」云々として、周囲組織との周約結紮することある旨を記載している。術後の不測の出血には直ちにトルネケットを装させて救急止血を講じている。

本篇は僅々三丁半の小篇と附図二ではあるが、「瘍科精選図解」の該当図並びに、その説明と共に、わが外科に与えた影響は大きい。例えば、本間玄調の「続瘍科秘録」卷之一 安政六年 (著者蔵) の「脱疽」の記事はハイステル本からの示唆が大きい。

「脱疽ノ治法ハ截断ヲ第一ノ良策トスルヲ本邦及漢蘭ノ同クスル所ニシテ人々常ニ口実トスレトモ其治法特和蘭ニ詳ニシテ本邦漢土ニ能此術ヲ行フ者有ルヲ聞カス」とし、華岡青洲ですら「指ノミヲ截リ脚腕及膝等ヨリ断スルヲ禁ス」としている。本間玄調棗軒は、自身が江戸に僑居している時、近所に「譚説ハナレカヲ売テ業トスル者 (名テ全馬)」があつて、「一脚股ノ半ヨリ無シテ残ル処僅ニ四五寸ニ過キス」このわけを詰問すると、「先年脱疽ヲ患ヒ、一医ニ請テ股ヨリ断截セリト云フ、療治ノ首末ヲ聞クニ、其説、洋説ニ符合ス、實ニ是奇術ニシテ庸工ノ能スル所ニ非ス、予慨然トシテ此術ヲ試ミント欲スルヲ年既ニ久シ」、即ち本間棗軒以前に、既に「股ヨリ断截」した一医のあったことを示している。そしてやっと安政丁巳四年 (一八五七)、夏四月五日に岡部辰蔵 (右脚脱疽、三十五歳) の右大腿部からの切断手術が敢行された。

麻酔は麻沸湯、切断術式は全くハイステル本の術式の通りである。「動脈断テ血大ニ迸リ出ツ、小ナル者ハ烙鉄ニテ止メ大ナル者ハ動脈鐮ケヒキ子ニテ引出シ麻糸ニテ紮住ス」一般には本症例がわが国最初の下肢 (大腿部) 切断術の記事とされている。一八五七年といへば、世界の外科史の上でも、よくこれ迄に世界の最初の切断手術と云われたものである。しかし、すでに一八二四年の一月十六日にはイギリスの血管外科の先覚者 Sir Astley Pauson Cooper, 1768-1841 が Guy 病院で、股関節で下肢の離断手術に成功 (当時の Lancet の記事が W. J. Bishop の本に載つてゐる) しているし、本間棗軒のこの症例迄には未だ多くの報告例がある。従つてこの本間棘軒の大腿部からの下肢切断術は勿論、世界最初とは云い難い。

しかし、ハイステル外科の示唆によって、わが国最初の、この手術を敢行し得たことは偉とせねばならない。

ハイステル外科に於ける四肢切断の篇は本間棗軒より一世紀以上も前の事であるから、原始的ではあるが、わが国にこのように大きい影響を与えた。しかし、この「手足切断篇」は転写中に誤写が多く、翻訳も完全ではない。

⑥ 阿蘭陀正流（一冊、文化九年三月五日後書（茅原本））

その中で伊勢の国、越邑德基の父である幽蘭齋、越邑図南著の「阿蘭陀正流（急撮要十術）」の「止血瘡大出血」にも

⑦ 「人身中に順行動脈逆行血脉と云血管あり、頭手足に多し、此管を傷ときは疵小なりといへども、血を吹出す勢ひ強く、何やらの血止薬つけても、いうやうに縫合ても血止らず、彼此といふうち一身中の血を残なくくり出し、終に死症となる。其時この達刺（アイバヤ）虫度の術を施バ血速に止るなり」とある。そして、この止血法を第一として、接断骨、帰脱臼、拔出炮丸、分娩難産、快通大便閉塞、快通小便閉塞、帰落下頰（下顎脱臼整復術―蒲列胡窟の術）、縫合欠唇、断截六指之術、

以上の十術の記載である。――これらの術は「吾家の秘術といふ事にあらず、是蘭医奇意（ヘイステル）私的爾得（メイステル）児の著す書中にあるところにして術家の知るところなり」とある。ヘイステル、メイステルはハイステル医師のことである。従って、本書は最も簡単なハイステル本の解説書ともいえる。茅原元一郎氏によれば、図南の著でなく、德基の筆になったものであろうとの事である。尚、茅原氏蔵古文書によれば、図南、越村深蔵は通称図南、字士虚、号は幽蘭齋であって伊勢国安濃郡津八町の出身（西村貞氏は「伊勢津市新町八丁ノ人」とある）父は新助照清、母は林原氏から出、家は世々医を以て業とすと、長じて江戸に出て杉田玄白、大槻玄沢の塾に入り、伊勢に帰り、蘭方医術拡張の為、北勢四日市及南勢一志郡太郎○村、伊賀の名張に診療所を設けて精励したと、晩年には男大輔にこれを譲り、大和の十市ノ郷に寓居し、診療を続けたが文化十一年一月十六日（西村氏は二月十六日）卒した。

「瘍科精選図解」の著者、越邑德基、士祥が第二代図南（図南は四代ある）大輔であるか、否かの考証は曾て西村氏の詳細な論文がある。⑧ 「長崎ニ到り蘭人某之塾ニ入り専ラ苦学研究シテ終ニ精巧之奇法異術ヲ修メ」たのである。同書の秦世寿の序文によると、南泉吉雄常三（吉雄如及の子、耕牛の孫）にも師事していることがわかる。士祥の父初代図南は

「蘭説弁惑、一名磐水夜話」二冊刊本天明八年作、寛政十一年伊勢津出版 これは「磐水存響」によれば「伊勢の医人越村図南の梓行する所にて挿図は亦市川岳山の筆なり、原図のまゝ木版とす」とあり、同書の末尾に「越村図南元来市医なれど藤堂侯挙て蘭方医員とす、文化十一年正月十六日歿としてある。又「和蘭内照官能真言」大槻磐水撰 寛政九年刊 も図南の家刻である。

「瘍科精選図解」にはハイステルの画像(ラテン語版 TON. 1 とは全く異り、蘭語版の中央にハイステル像、それを囲んで四人の天女とヒボクラテスと想像される有髯の士の像がある)とラテン語版の TAB. XV の Fig. 1 は前膊切断図、Fig. 2 は下腿切断図、のうち「瘍科精選図解」には、この下腿切断図が入っている(蘭語版は、この下腿切断図)。そして、「脱疽等不治疾鋸解患状」とある。何れも牧墨僊自刻の銅版画であって、後摺版(伊勢津立町山形屋伝右衛門板)(京大本)にはハイステル像の代りに「苛意志的爾全図臨摹」、更に前記下腿切断図は木版刷に代っている。この下腿切断図が一般わが国外科者に与えた影響はこのように誠に大きいものがある。

① 「歇乙斯的児、第二十、藥泉論」宇田川榛齋稿 写本(天理本)

② 「瘍家大成」写本、一冊、杉田玄白著(富士川本)

以上の二部についてはすでに触れた。藥泉論迄訳本が流布しているところを見ると、さらに調べれば、尚多くの各章の訳本があることは大体想像がつく。

③ 痼疾卷之上、中、下、三冊
新書「要術知新」文政七年甲申新彫 磐水先生閣 鈔訳 (一八二四) 大槻玄幹訳

発凡例言に「此編ハ瘍医新書治術諸篇、通計一百八十三篇中ノ臀肛手術ニ係ル部中七八篇ヲ抄訳シ増補ト図説トヲ添ヘ分テ三巻トナシ」とある。

原著では(表第一五)に示すやうに Operations welche am Hintern vorkommen. 156 Cap. Von Applicierung der Clystieren (s. 760) 164 Cap. Von dem Abscess am hinteren (s. 783) 及び 67. Ninten 語版は CLX—Qua ratione adliberi clysteres seu lotiones debeat s. 1097—CLXIX—De ani abscessu. s. 1136 迄に相当する。蘭語版は CLIX Van het klistieren—CLX

III Van de Etergezwellen aan den Aars. 迄である。即ち、外科誘導篇ではドイツ、ラテン、蘭語の各版は夫々該当章の一致を見ていたが、此編では、もはや見なくなっている。

訳本〔要術知新〕は灌腸法篇、消息子篇（巻之上）。痔漏篇（巻之中）。肛門膿瘍篇、痔核篇、痔血篇、痔腫篇、外用諸具図説、増訳（肖墨盧^{シヨメル}）（巻之下）。であって、全く抄訳である。ここで追記すべきは各章末に増の字を冠して、蘭訳者軒第礼吉^{ヘンヂキ}、鳥膚呵倫^{ホコリン} Hendrik Uthoom（前出）の増補を記載していることである。此に、肖墨嚙からの引用を増訳（巻之下、二十丁裏以下）、追加している。即ち、「厚生新編」（前出）の第二巻中の疾病部、巻之一、「痔」（四十一頁以下）、第三十八巻中の雑集、「脱肛」（四七〇頁以下）、第四十八巻中の雑集、「浣腸法」（五九九頁以下）がこれに該当する。

本編の特徴は三つある。

(1)、痔疾に使用する諸医療器具の図並びにその使用法の詳細な解説によって、熟痔漏、未熟痔漏（完全痔瘻及不全痔瘻）、内面未熟痔漏、外面未熟痔漏（括約筋肉及び外がこのように分類している）の説明である。前者については膀胱囊（羊、豚ノ膀胱ニ薬汁ヲ盛り肛門ヘ注射スル具）、胞消息子^{カチーテ}、水銃^{スイシュ}、煙銃（タバクス、キリストール、本書には創始はイギリス人だとする）、注膏管（膏薬ヲ肛門ヘスル、管）、痔漏刀、痔漏鏡（肛門鏡）、骨朶痔漏刀（タマツキ痔漏刀）、勾曲痔漏刀、溝消息子、骨朶消息子、鈎消息子、尖消息子、匙様消息子、以上十四具である。

尿道膀胱直腸図（巻之上、八丁）は第廿二号一ノ図となっている。（ラテン語版の TAB. XXIX の Fig. 1 及び 2 に当り、ドイツ語版は Tab. XXII. Fig. 1 及び 2. として蘭語版は Tab. XXII. Fig. 2 及び 3 に該当するので、その番号である）。「瘍科精選図解」の第二十二葉、一図に該当する。その説明には「男子勢内之尿道ヲ詳示ス」とある。尚、この図は杉田玄白の「瘍家大成」（前出）にも、男子及女子穀道之図として、ハイステル本から採っている。これは簡単な図であるが肛門外科には重要な役割を演じ、本間棗軒も「断截ノ法ヲ施シハ肛門ノ内ヲ詳ニセザレバ治ヲ施シ難シ、予ハ三度マデ人屍ヲ解剖シ、直腸ト肛門トノ位置ヲ知ルヲ得タリ」と云っている程である。これは「其治法（肛門）和蘭翻訳ノ書ニ載

ルト云ヘドモ其概略ヲイフノミナレバ、其書ニ拠テ治療ヲナスベキニハ非ズ」とし、實地に手術施行に當って、このように、さらに探究している。

さらに重要なのは痔漏の図示解説である(巻之下、十五丁裏)。痔瘻手術に重要な括約筋を示し、とくに括約筋内及括約筋外手術を分けてはいないが、図示によって、自らその区別を示し、不完全外痔瘻(外面未熟痔瘻)を完全痔瘻とし、不完全内痔瘻(内面未熟痔漏)を肛門鏡を用いて、同じく完全痔瘻として截断している。尚この図説の原図(蘭語版)はTab. 24, Fig. 10 及 11 であって、ラテン語版はTab. XXXV の Fig. 2 である。この二つの図解は本編を理解する上に於て、当時は貴重なものであったと想像されうる。

(四)、痔漏の断截は、本書の最も強調する処で、とくに括約筋断截を敢てする為めに「閉筋ヲ切断スル為ニ柔撓ノ銀息子ヲ外面ノ漏口ニ入レ、肛門ヨリ抜き出スナリ」。又、「外科者流、内面未熟痔漏ニ手術ヲ施サス藥劑ニテ治スルコトヲ述フレトモ余之ヲ信ゼズ」と強い信念を示し、又術式中膀胱状結締織壁を完全に切除していることと、「閉筋モ切断法ヲ施ス」「二三次ニ及フトモ更ニ損害ナシ」と断言している点は高く買うべきである。(同一場所に於ける括約筋との前置きがない)「瘡悪性ニシテ手術ヲ施シ得ザル等ノ症」は姑息的にせよとあるは、恐らく直腸の癌を指す。

痔核は「藥物ニテ消スベカラズ、手術ニテ抜き去ル」(猶諸部ニ発スル疣贅ノ如クスベシ)とし、又増訳には烙鉄を使って焼灼除去している。

(五)、本書はハイステル本からの抄訳にとどまらず、蘭訳者ウールホルンの註の増訳を多く採択している。とくにウールホルンの師「ガレンデオット」の意見を多く採っていることである。ウールホルン(前出)は軍医として出征後一七一三年にDuvemyの門下としてバリーに留学したが、その当時の師の一人がこのRené-Jacques-Croissant de Garengcot, 1688—1759である。ウールホルンが学んだ頃は有名な「Traité des opérations de chirurgie, fondé sur la mécanique des organes de l'homme sur la théorie et la pratique la plus autorisée, 2 voll, Paris, 1720」が出版された頃である。従って、本編はハイステル本以外にフランス外科の影響が大きい。とくに巻末の肖墨嚙(前出)の増訳があつて、その点一層著しい特徴をなしている。

① 外科「繃帶図式」大槻磐里（茂楨）三冊（附録、図式）文化一〇年（一八一三）序と繃帶法。

(イ) ハイステル本の繃帶は巻末にある（蘭訳本 *Deel der Heelkonst* (III) 2) *Van de heilkundige Bandagen en maniere van verbanden*。があつて、第一章から第八章までである。ドイツ語版は（表第一五）参照、ラテン語版は第三部がそれである。Fasciis et vinculis chirurgicis であつて八章に分けている）。その記載は整然とし、各外科史家も、劃期的なものだといふ。

(ロ) わが国の繃帶法は全くハイステル本がすべての基幹である。例えば吉雄耕牛の「和蘭外科巻木綿」写本一冊、天保六年六月、杏斎手記（著者蔵）や耕牛の「巻木綿図」（布施本、前出）に見られる図は大体ハイステル本の図譜と一致する。

ハイステル本の外に按スからの図譜もある。

(ハ) この「外科収功」は「瘍医新書」の一貫した訳業の一部である。

桂川甫周（月池）が繃帶法研究に着手、友人の大槻玄沢（盤水）が引続いて友人たちと共に、之を实地に行つて研究し、其の子の大槻玄幹（磐里）諸子を集めて再び講習し、この繃帶図式を作製した。これは桂川国寧の本書の題言に詳しい。

「松山医員故ノ進村文碩」が玄沢に従つて、「瘍医新書」中の縛帯編の講義を受け、玄幹を中心に長谷川宗仙、渡辺三直らと共に繃帶法の実習をして漸く完成した（享和二、三年頃）。図式の不備のまま文碩が卒し、玄幹がその後、長崎に遊び、吉雄氏について繃帶法の大略を修得し江戸に帰った。その頃（文化四年）杉田立卿が子弟を集めて、繃帶法を講習し、玄幹も亦、未完の図式を文化八年夏、雲潭平氏を勞してその図式を描かしめ、毎図に、帯名と寸尺、主用を附記して小冊を作った。さらに立卿と謀つて、訂正再校の上雲潭平氏をして淨描せしめて上木した。そして「瘍医新書」の縛帯編総論中の重要事項を抄録して、凡例をつくり、これを附した。（文化十年夏六月、大槻茂楨識に拠る）。

本書の巻之下、巻尾の跋によると、玄幹は芝蘭堂に諸生を集め、「或ハ祖湯シ或ハ裸体、或ハ欹側シ或ハ箕踞シ、或ハ起チ、或ハ臥シ、或ハ仰キ、或ハ俯シ」、頭面、耳、目、胸、背、脇、腹、手、肘、臂、腕、手指、腰、臀、腿、脚、踝

跟の各患処について実地に縛法を受けさせて、互に交代せしめた。従って、この繃帯法はハイステル本を基準にしてはいるが、前述各氏の考案になるものが加っている。

1773—1831

(二)、現行の繃帯法の基本型は概ね揃っている。Sculet (Johan Schultes) 又ハ J. Sculetus) の多頭帯の前段階である多裂帯もあり、且この時代には既に Schleuderbinde (投石帯) も丁字帯もある。勿論頭部巻軸帯のヒボクラテスの帽状帯もある。同時代で、ハイステル後の蘭学に屢々現れる Johann Christian Anton Theden (前出) のの全肢纏包帯はハイステル本には現れていないが、本書には折転 Dolabra seversa の伴はない螺旋帯 Dolabra currens で一肢全体を纏包している。

即ち巻軸帯は一頭帯、二頭帯、多頭帯があつて、前述のように環行、螺旋、蛇行はあるが末だ折転はない。勿論デゾーウエルボー氏の特殊法はない。しかし、頭頸胸帯はある。

一部副子繃帯を示す。脱腸帯及び提辜帯がある。

(外)、縛帯図は、その他種々の写本類が流布している。その代表は「繃帯図説」写本、一冊 嘉永六年 中島玄覺著 (著者蔵)である。又

京大本に伊藤貞庵の「繃帯図」写本、卷子 (文化年間) があり、何れもハイステル本に拠っている。幕末及び明治初年には

Goffres の "Handboek van de Leer der Verbanden en Vesband-Instrumenten" Leiden, 1869 (C. Rademaker 及び A.W.G. Zubli による蘭訳) 及び W. Heineke の "Compendium der Chirurgischen Operations-und Verbandlehre" Erlangen, 1872 など

が最もよく行れた (山口県華浦医学校蔵書等)。Goffres はフランスの軍医である Joseph-Marie Goffres, 1808-1869 だ、

"Précis iconographique de bandages, pansemens et appareils" Paris, 1854 である。モンペリエ病院に勤め、泌尿器外科に

著聞であつた。そして Heineke は医家三代続いた有名なハイネッケ家の三代目の Walther Hermann Heineke, 1834-1901,

であり、エルランゲン大学の外科教授である。前述の手術と繃帯学は名著で一八七二、一八七四、一八八五年と三版を重ね

蘭訳されて、わが国にも渡つたのである。

(三) 前記のゴーフルやハイネッケの繃帯法は全くハイステルから脱したものであるが、明治に入ると、文部省版に「撒善

「篤繃帶式」明治五年刊
田代基抄訳卷之上、下、二冊 附図一冊（著者蔵）がある。これが現行繃帶法と殆んど同一の基準に達し、折転法は勿論、デゾーその他の特殊繃帶法も完備している。

他方、明治六年に刊行された海軍々医生、半井成質の「外科拾要」英国、拘刺児傭氏編集
養竹斎藏板、八冊著者蔵（後述）の卷之八、第四十

三編、繃帶式（バンデーディング）は術式の記載はないが糊質繃帶や硫酸石灰繃帶（ギプス）を追加している。東校医院官版の「治験録」^③（中野操本）には「シューテンノ發明セル法」即ち不動繃帶（繃帶上に澱粉護謄溶液塗布）及び、前述の硫酸石灰繃帶つまり、ギプス繃帶を使用している。シューテン不動繃帶とはドイツの所謂「Der Pappverband nach Seutin」1840 がそれである。この本は Karh Frech の著であるが、これがオランダのシューテンの「Mém. sur le bandage in amovible lu au Congrès méd de Belgique, 1836」や「Mém. sur le traitement des fractures en général par le bandage amovible donné」1837 から採ったものである。シューテンは Louis-Joseph Seutin, 1793-1862 ブラッセルの人である。

(B)、前述したように忠庵系外科には繃帶法の記載はないが、栗崎系外科には原始的な繃帶法を認める（「栗崎流問答録」前出）の附録に「巻木棉寸法」がある。

「海上備要方外傷門」蘭、揚可島聞蒲爾弧著選、
文化三年（一八〇六）桂川甫周（国瑞）訳解、二冊（富士川本）の器械図の中に腹帶肩帶齊施法

や肩帶、施圧綿法、両頭縛綿、頭綿睡帽纏喉条齊施法、最後に手指分纏法以防駢粘、布片作仮面状、のものがあるが、これは卷末の国寧の識にある通りに、原本には図画がなく、作者の集録であって、ハイステル本からの採用が多い。

以上のように繃帶法はハイステル本に負うところが大きいことを特筆しなければならない。

④ その他のハイステル外科書の訳書

昭和卅九年十月卅一日開催の古典籍展観大入礼会に芝蘭堂塾、蘭方医書、三十四冊の写本があり、その中に表第十四に示したように

「腫瘍編」と「脱臼整理鈔」、「腹肚刺穿編」を見た。しかし、その内容は未見である。

このように、ハイステル本の翻訳写本類は芝蘭堂塾を中心として、完成されていたものと想像される。

⑫ ハイステルのわが外科学起始に与えた影響

ハイステル本の殆どすべての部を先人たちは克明に翻訳し、その影響は誠に大きい。ハイステル像が多く流布した所以である。とくに、華岡青洲への示唆、影響はゆるがせに出来ない。即ち、ハイステル本は日本外科の起始に当って、すべての指導書であったといっても過言ではない。

引用文献

- ① D. Laurentii Heisteri, "Compendium Anatomicum, Amsterdam 1748 (著者蔵) S. 81
- ② 阿知波五郎著「ハイステル」(九大医報、第三二巻、第五号)三四—三八頁
- ③ 長崎談叢「第二三輯」
- ④ 茅原元一郎著「Van Dyke について、北山寒巖とその洋風画」(三重史学、第三号、一六三〇年四月)
- ⑤ "Institutiones chirurgicae," (著者蔵) 巻頭 Bibliotheca chirurgica, sive scriptores mei chirurgici.
- ⑥ W. J. Bischoff, "The Early History of Surgery," 1960. pp. 116—130
- ⑦ 「近藤正斉全集」第三巻、二五六頁
- ⑧ 「蘭学事始」杉田玄白著、緒方富雄校註(岩波文庫、五〇九五、昭和三十七年三月二十日版)一九—二二頁
- ⑨ Leo M. Zimmerman & Ilza Veith, "Gseat Ideas in the History of Surgery." pp. 313—323
- ⑩ Viktor Fossel, "Studien zur Geschichte der Medizin." 1909. S. 120
- ⑪ "Medizinische, chirurgische und anatomische Wahrnehmungen," 1770
- ⑫ 板沢武雄「厚生新編訳述考」(史学雑誌、第四十三編、第九号、昭和七年八月)
- ⑬ 「厚生新編」
 和 蘭 西、ノエル、シヨメール原著
 和 蘭、デ、シャルモット訳補
 日本、馬場貞由、大槻茂質外五氏重訳、静岡、厚生新編刊行会発行(昭和十二年八月三十日) 一頁
- ⑭ 同書、三十頁

- ⑮ 新宮涼庭「療治瑣言」卷之上、十七丁
- ⑯ 「手足切斷編」写本、一冊
- ⑰ 本間玄調「統瘍科秘録」卷一、一丁裏
- ⑱ 同書、四丁
- ⑲ W. J. Bishop; "The Early History of Surgery," pp. 136—137
- ⑳ 越邑図南「撮要十術」三—四丁
- ㉑ 同書、跋一丁
- ㉒ 西村貞「瘍科精選図解の撰者について」(長崎談叢、第三輯)
- ㉓ 「磐水存響」乾五頁
- ㉔ 「瘍科秘録」卷一、四丁裏
- ㉕ 「要術知新」卷之下、一五丁裏
- ㉖ 同書、卷之中、二八丁裏、増
- ㉗ 同書、三十丁
- ㉘ 同書、三十八丁
- ㉙ 同書、三十八丁
- ㉚ 同書、卷之下、七丁
- ㉛ 同書、八丁
- ㉜ 同書、卷之下、二十丁裏以下
- ㉝ 東校医院「治験録」卷之二、十五—十九丁
- ㉞ 「海上備要方」二卷、三—四丁
- ㉟ 同書、五丁

③⑥ 同書、九丁

③⑦ 同書、十丁

(3) 瘍科新選

「瘍科新選」卷一―五五冊杉田玄卿重訳、天保三年（一八三二）熱爾瑪泥亜国医布連吉原著、和蘭国業泄児蘭訳

② 原著書原作者及蘭訳者

この原著はウイーン学派の Joseph Jakob Edler von Plenck, 1733-1807 の “Compendium institutionum chirurgicum” 2 voll., Wien, 1776 である、この本は一七八〇年再版、三巻のドイツ版は一七七七年に出た。五版は一八〇一年、七版は一八二二年と当時としてはよく行れた良書である。蘭訳者のゲツケル（業泄児）は David van Gescher, 1736-1810 でアムステルダムの外科医である。“Hedendaagsche oefenende Heelkunde,” Amst., 1781 の本は最初は一巻で後に三巻、（一七八六年以後出版のもの）になっている（ハイステルの章参照）。

ブレンキはわが蘭学にはハイステルと共に最も早く知られた。生粋のウイーンの人、J. Chr. Retter について外科を学び出征後 Tynau 大学に迎えられた。著聞の著書だけでも二十六部に及んでいる。

② 成立

「瘍科新選」の凡例に「文化甲戌春、和蘭人入貢于江都、余就客館、偶見斯書、因取閱之則自腫瘍潰瘍以至創傷脫垂骨病不具諸篇、凡係瘍科術者、整然臚列、無有不備、洵可謂全書矣、喜而購之」このようにして訳定し、十余年後にゲツセルの外科書を得て、さらに訳をすすめて、はじめて、この本の成った旨が述べてある。

③ ブレンキの医学思想

同じ杉田立卿訳「眼科新書」^①に現れた原著者、入爾瑪泥亜国医、セカルマニヤ郁泄弗、ヨイセツス牙哥勃、ヤイコッブ不冷吉は徹底的に「其論定証候治術」^②

也、一従内景而來」であり、さらに「彼術一以解剖為宗原、為先務者弗啻知其常以応其変之用心、亦或将与彼洞視人蔵府者頗頗乎」である。従て、^④プレンキに「解體則」がある所以である。多血性を論じて血量多きは「血胞必多」とブルハーヴェ説を採り、凝体の分子が自己の動揺にて損傷、消滅がないのは分子間の引力が強いからだとする。ゴルテルは纖維を八種に分類（前出）したが、^⑤プレンキは皮膚病を症状分類ではあるが十四種類に分けている。この“*Doctrina de morbis cutaneis qua hi in classes genera et species rediguntur*,” Wien, 1776. は以後の近代皮膚病分類法の最初のアイデアをも持合せていた。たとえ、これが内科のシデナム（前出）のように症状分類であつたとしても、十九世紀の病理解剖による皮膚病分類をした Ferdinand von Hebra. 1816-1880. に連関性を持つフランス的な *locus operandi* である。そして、前述の「眼科新書」の原著、“*Doctrina de morbis oculorum*,” Wien, 1777. が^⑥史家によって近代眼科学の形態を備えた最初の良書とされる理由でもある。プレンキは前述したように一七七〇年以来 Tyraun の産科と外科の教授となり、一七七七年には Ofen に移り、有名な啓蒙的君主、ヨセフ二世によって開かれた^⑦ Josephinum の植物と化学の教授となり、その間に、多くの著書が執筆された。ウィーン学派はバン、スウィーテン（前出）によって旧ウィーン学派が開かれ、その直後に有名な Leopold Auenbrugger 1822-1804 が出た。プレンキは、その次の時代、即ち有名な啓蒙的君主であり、最も開けた帝王であつた Joseph II 1741-1790（その母は有名なマリア、テレサ）の時代の人である。従つて、旧ウィーン学派の影響を多分に享けながら、フランス的な *locus operandi* に進んで行つた医人である。そして、すぐ次の時代には有名なメスメリズムの Friedrich Anton Mesmer, 1757-1828 や、骨相学の Franz Joseph Gall, 1757-1828 の時代になるのであるが、そうしたロマン医学前のウィーン医学を守つた人の一人である。従つて、これを正しい旧ウィーン学派といふのは疑問である。Ignaz Rudrich Bischoff（毘斯骨夫）（前出）も同じく、この範疇に入る。要するに、ライデン学統から出た旧ウィーン学派の影響を多分に享けさ、らにフランスの進歩的な医学思想を持った人であり、ゴルテルの生粋のライデン学統、その雰囲気を持った人とは、自ら思想を異にする。たゞプレンキがハイステルと共に、最も早く伝来したのは、その影響を多分にうけたゲッセルがオランダ人であり、この事実と、蘭館 師たちの間に関聯性があるものと想像される。

④ 「瘍科新選」の医学史的意義

この「瘍科新選」が *Compendium* の訳本であるから、ハイステルやゴルテルとは趣を異にする。即ち、これらの本が何れも「過於浩瀚」ている。プレんキのこの本が「未簡捷の切若斯書也」である。従ってハイステル本が遂に全冊の訳本が現われない（写本数を集めれば、大略重要項目は訳了されている）で終ったのに、このプレんキ本が、杉田立卿によって訳了されたので、簡潔ながら、当時のヨーロッパ外科学に全面的に接しえたのである。このように *Compendium* でありながら、前述のプレんキの皮膚病に於ける分類で見られるように、この本も亦「整然臚列、無有不備、洵可謂全書矣」であった。この簡約外科書から、次に涼庭の大冊、「窮理外科書」が現れたところに意味がある。プレんキは多くの著述をし、耕牛の「布斂吉、黴毒論」、杉田立卿の「黴瘡新書」、高野長英の「黴瘡摘要」が *Doctrina de morbis venenis Wien, 1779* から採り、又、新宮涼民の「小兒全書」が *Doctrina de cognoscendis et curandis morbis infantum, Wien, 1807* が原著で、普山や涼庭らの解剖訳本が *"Primae lineae anatonies in usum praelectionum," Wien 1775* によつてなるなど、プレんキの著書は非常に多く、わが国への影響はとくに多い。

⑤ 「瘍科新選」の特徴

「瘍科新撰」の特徴は外科疾患の *noseology* 上の意義である。「瘍医新書」（前出）に現れたハイステルの分類は、その首巻に現れた第一部は創瘍、骨傷、脱臼、腫瘍、潰瘍、で、第二部は手術篇である。「瘍科新書」のプレんキの分類は、ハイステルのそれに比し、著しい進歩を認めうる。即ち、大きい分類では大体ハイステルと同じであるが、たゞ、ヘルニヤなどの脱垂篇を新に独立せしめている。腫瘍篇を例にとるならば、依然ハイステルと同様焮衝（炎症）を腫瘍篇に入れている。従って、その結果、膿瘍部と壞疽部が、この篇に入る。一般腫瘍は病理解剖前の分類であるので、良性、悪性の区別はなく、肉眼的な分類、即ち硬腫（癌を含む）、水腫（脊髓腫、頭水腫、胸水腫、関節水腫を含む）、血腫（動静脈瘤及び痔核を含む）、さらに囊腫（現行の良性腫瘍を主とする）、新しく肉腫（肉腫の外に、母斑、各種のポリープを含む）土腫（現行分類にない腫瘍内容物の土様のものを一括している。痛風腫や舌石腫を含む）、その他、気腫、唾液腫、胆液

腫胆囊腫、尿腫（膀胱腫）、乳腫（乳汁滯溜によって起る乳房腫などであるが、とくに奇異に感ずるのは、この部の四支腫腫である。これは「乳汁転輸于四支脂膜中者」である。即ち鼠蹊淋巴腺腫や、腋窩及び肘淋巴腺の腫脹を、乳汁滯溜のためとする淋巴腺転移をかく観察しているのは誠に興味深い）などである。以上のように、プレנקキは“Doctrina de morbis cutaneis”（前出）に於て有名であるように、リンネ（前出）の分類の影響が大きく、肉眼的形態的の分類法として、他の類書を圧している。

① 内 容

プールハーヴェの物理的な鬱焔積理論から、衝（炎症）治療の第一は依然、刺絡が首位を占めている。しかし、胸膜^⑩には穿胸法を慣用する。壞疽^⑪には切断を慣用する。癌腫は、硬腫の「遷延日久」ものが変じてなると、潰瘍とならないものを隠伏癌、すでに潰瘍化したものを開口癌としている。治法は「宜行切断法」のみである。もはや切断法の実施不能のものは対症療法による。癰癰^⑫は、癰癰毒による。水腫部の頭水腫の治方に、「若鑽蓋法、無益而有害也」、すでに当時は穿顱術^⑬に対し批判的である。又、脊髓水腫の治方に「此症為不治、或雖用剖割法、殊為無益而却令其速就死地、故保護法外無他伎倆也」当時の制腐法前の状態では当然である。しかし、脊髓の剖割法の存在を認める記事は注目に値する。すべての水腫には穿利法を実現している。腹水腫に刺腹法を実施する如きである。動脈瘤の中に「仮動脈腫」を入れている。真動脈腫の起因を外傷によって「動脈外膜之衰耗」とし、刺絡術の誤用によって発することがあるとする。真動脈腫の破裂を記載し、「行手術」とあるが、詳細の記載はない。動靜脈腫、殊に刺絡の誤用によって（主に肘中靜脈）、靜脈に「發鼓動」とする。又、外痔核は「因痔脉膨脹而發囊狀腫於直腸或肛門者也」である。その治方は大体、すでに現代慣用のものと同じになっているが、奇異な治方に「薰蒸法」がある。この方は、すでに「栗崎流外科專方」（前出、道有自筆本）の痔漏の治方に図示、説明している。即ち、箱にフラスコを入れ、その中に藥劑（タバコを入れることがある）を入れ、その薰蒸を直接、坐して肛門部に入れるのである。良性腫瘍である囊腫は「因其蘊蓄者压迫脂膜而脂膜逐為之囊也」で、その種類も密腫、糊腫、脂腫、骨脂腫、水泡腫、脂腫腫、豆腫、筋核等である。豆腫は Cichkmaus を含み、筋核と肉腫

は、はっきり鑑別し、筋核中にはガングリオンを含む。肉腫は「以肉質纖維成之、而多少堆起者也」し、「誤其治則命交癌瘡者也」とする。「過多運輸養液於一処也」が近因とするのも止むを得ない。何れも摘出をすすめている。ただ懸垂する者（ポリープ）は「以蠟糸、紮切之」といい、すでに南蛮、紅毛期（前述）にも行れた方法である。本書にも鼻痔（鼻ポリープ）に切断法と共に「紮切法」とあるのは、この法を指している。体気腫の中で、肋骨傷、肺傷などによって起る現在の気胸の記載がある。「蒸発気閉塞、或空氣分離、而含著于脂膜中」して生ずる。放置しても「自然消散」するものがあるが、剖割法によって空氣を除去する。剖割法が果して現在の開胸か、穿胸か不明である。又、胆液腫に「転輸管閉塞、而胆液留瀦于胆囊内者也」であって、「或生結石、而閉塞泄出管」そして治方として開破法を行う記事があるのは注目すべきである。即ち、開破法は「其腫之固著腹膜者」のみに限るもので、当時、わが国外科にとっては新しい治方とすべく、膀胱腫（結石を含む）に蠟線子を使って導尿を施し、或は碎石術と共に重要な記事である。

⑤ 潰瘍論

潰瘍篇、潰瘍を二次感染の結果とし難い時代であるので、全身の何れにも発するもの（発無定処者）と、局処に局限して発するもの（発有定処者）の二つに分類するのは、その時代の慣例であった。その原因も、創傷、暗傷、瘰癧、内蓄醗腐液、外襲苛烈毒の五つに分けている。従って、癌末期を、とくに癌毒瘍とし、近傍を浸蝕腐爛し、「疼痛難忍、惡息殊甚」と記して、その治方も「古今未有發明的切良者」とし、姑息的に「悉鳩答」^⑧（^⑨シキユウダ）を使用して鎮痛にとどめている。この「悉鳩答」は、ウィーン学派の慣用するもので、すでに長崎訳司、西吉郎右衛門訳「シキユーター説」（写本一冊、弘郎斯国ウエンネン医、アントーニーストルク著「シキユーター説」、和蘭のビッケル蘭訳、一七六〇年に拠ると記してある）がある。この原著を考証すれば著者は、Anton Stoerck 1731-1803. であって、ストオルクは有名なウィーン学派の人であり、マリア、テレサの侍医を勤め、バン、スウィーテンの後継者である。多くの薬物に関する著書がある。西訳の「シキユーター説」は恐らく「Libellus quo demonstratur, Cicutam. 4Bd. S. 696. ）」Cicuta 即ち Hyoscyamus niger（毒人参）か。この本は各国語に訳され、蘭訳は一七六〇年、仏訳は一七六一年になされた。西吉郎右衛門が何故「ストオルク」を「仏郎

斯国ウエンネンノ医」としたか、不明である。(この蘭訳が仏訳からの重訳の為に起ったとも考えられるが、仏訳は前述したように蘭訳より一年遅れている)。何れにしても、この“Cicuri”^⑤は旧ウィーン学派治療の特徴の一つである。そして、これは、このように、わが蘭学にも受容されている。

次に饒膿瘍^④がある。これは乳房や四肢に転移(腋下淋巴腫、鼠溪淋巴腺転移)を切断した後によくの膿液泄出する症をいう。飽く迄観察は正しい。乳房瘍を、乳瘍と乳癌に分っている。そして、この期の乳癌には、すでに前述したように「悉鳩答及樟腦」を使い、「可安非以延歳月」とする。

とくに興味のあるのは痔漏である。その分類も1、内外貫透症と、2、外部開孔症と、3、内部開孔症とし、治方もすべてを内外貫透症にし直して、それから、その管瘍を全剖する。全く現代そのままである。

⑤ 創傷篇

従来長崎系の通詞外科に現れたものと、大同小異である。つまり、栗崎流に見られる必死創、誤死創、の分類は大体これと同じである。この項は、現代外科学が当時の必死創を、どの程度迄、開拓して、救命しうる創となしえたかを考える場合の資料となりうるので、繁を忌わず、左に掲げる。

⑥ 「第一、障碍靈液順環於周身之創、

其一、大小脳髓之深創、

其二、延髓創、

其三、脊髓創、項部特為重、

其四、第八対神経、肋間神経、横隔膜神経幹之創、

第二、妨害血液運輸於心臓之創

其一、心室心耳及心嚢之創、

其二、頭頸及胸腹膜内動静二脉之創、

第三、欠損呼吸吐納之創、

其一、全断氣管之創、

其二、氣管技創、

其三、両胸腔或偏腔兼傷縱隔之大創、

其四、肺大創、

其五、橫隔大創、

第四、妨碍乳糜製造之創、

其一、胃管大創

其二、胃及厚薄二腸之大腸、是不能附着、又不能造義肛者也、

其三、乳糜囊、乳糜管、乳糜脉等之創、

其四、胆、胆管、胆管之創、

第五、不能閉止諸液漏泄、又不能驅除血液溢入之創、

其一、血液溢入腦蓋之症、此症則腦髓空陷、腦胼胝質上、或腦分披之間、或小腦中隔上下等之創也、

其二、溢入胸腔之症、此症、則心囊橫膈膈等之創也、

其三、溢入腹内之症、此症、則蓋内、腹膜後部等之創也、

其四、不能閉諸液漏泄之症、此症、則輸水管、胆胝二管等之創、

すでに銃創^⑧は著しく近代的になっていて、創には射入口（納口）と射出口（吐口）があり、納口は「周圍為褐色」、その治療に刺絡法が屢々行れるのは致し方ないとして、留弾を残置するも障碍の見られない旨を「嘗見銃丸深入、逐不得除去而多歴年所者也」としている。

神經創^⑨に対し、未だ神經縫合はなく、攣急、牙関緊急、角弓反張、壞疽の記載がある。重症には四肢の全断が実施され

てゐる。

④ 臍創には拔爾撒謬^{バルサミ}劑を貼し、繃帶法を施して患処を整置した上で、「以使接統其断臍為要」とする。

血脉創には第一に結束法^④を推している。「結束法実為的実良善之要術也」となし、焼烙法は「若其痂膿潰、而剝脱、則再為出血、故為非十全良法也」である。圧定法は十五日を待つて繃帶を解けとする。

腦創には穿蓋法^④(穿顱術)を施して敗血を除去せよという。腦創の分類も腦蓋剝露、毛裂(腦蓋外板微為破裂)で墨を塗って、その部位を知る)、顱裂(腦蓋外板、顱然破裂)、全裂、響裂、内板破裂、外板破碎、内板破碎、さらに頭蓋骨の離隔、凹没、陥壞、堆起、齟齬、縫裂、を分類し、創の性質によって、さらに暗傷、脱除、腐骨を追加し、各項目毎に簡單ではあるが、的確な記載をなしている。

④ 肺創は必らず漏血鮮紅で、泡沫をなし、呼吸促進するの症を呈することを警告する。

④ 心室心耳創は必死であるが、心の外面のみの損傷で血腫を發しない者のうちは治癒することがある。

④ 腹創、この中で腸損傷は「宜施附着法」とある。附着法とは恐らく損傷部位を腹壁開放創に固定するの意と思われるが、「腸之為死壞者、亦宜切除之、而附着其両端」の記事が見られるところから想像して、腸の切断端吻合とも考えられる。この項に義肛を作る記事がある。人工肛門設置術を指す。

① 結 論

以上「瘍科新選」を綜合すると、ハイステルの諸訳書に較べ、著しく近代になり、解剖学を基盤とし、殊に腹部外科は一段と進歩している。とくに外科全般の一貫した移植としては最初のものである点に意義深い。

引用文献

- ① 「眼科新書」 卷一―五、附録、六冊 (著者蔵)
文化十二年(一八一五)
- ② 「眼科新書」 凡例二丁裏
- ③ 同書、附録(第六冊) 卷尾、跋二丁

- ④ 「解体則」写本、五冊
「窮理外科則」一八四〇（第四版）新宮碩是若訳（著者蔵）
- ⑤ 「窮理外科則」初巻、四丁
- ⑥ Cecilia C. Mettler : "History of Medicine," 1942. pp. 667-669
- ⑦ Ibid P. 1031
- ⑧ 一七八五年十一月七日、ウーレーンに med. chirurgische Josephs-Akademie 開設
- ⑨ Leopold Schönbauer : "Das medizinische Wien" Wien, 1947. SS. 157-175
「瘍科新選」巻之一、一三丁裏
- ⑩ 同書、一四丁裏
- ⑪ 同書、一六丁
- ⑫ 同書、一七丁
- ⑬ 同書、二二丁裏
- ⑭ 同書、二二丁
- ⑮ 同書、二二丁
- ⑯ 同書、二三丁
- ⑰ 同書、巻之二、一丁
- ⑱ 同書、二丁
- ⑲ 同書、十九丁
- ⑳ 同書、三丁裏
- ㉑ 同書、三丁裏
- ㉒ 同書、四丁裏
- ㉓ 同書、五丁
- ㉔ 同書、九丁裏

- ②5 同書、十丁
- ②6 同書、一二丁
- ②7 同書一四丁裏
- ②8 同書、一六丁
- ②9 同書、卷之三、一丁
- ③0 同書、一丁裏
- ③1 同書、五丁裏
- ③2 同書、六丁
- ③2 木村康一、木島正夫「薬用植物学」二〇四頁
- ③3 Leopold Schönbauer : Ibi, S. 129
- ③4 「瘍科新選」卷之三、八丁
- ③5 同書、一二丁
- ③6 同書、一二—一三丁
- ③7 同書、卷之四、二—三丁
- ③8 同書、五—六丁
- ③9 同書、七—八丁
- ④0 同書、八—九丁
- ④1 同書、九丁裏
- ④2 同書、一二丁裏
- ④3 同書、一九丁裏
- ④4 同書、二〇丁

(4) 「窮理外科則」

「和窮理外科則」初(卷一、二)、二(卷一、二)三、(卷一四)、四、五(卷一五)、六、七(上中下)八一十三
蘭 我爾德兒著、以羅甸文 新宮涼庭碩重訳(富士川本ニハ文化一四年、文政六年夫々第一編刊ガアル)(宗田本)
玉函涅斯、憲埜烈吉、格爾父増訳

⑧ 原著者

原著者は Johannes de Gorter, 1689-1762 である。オランダの Enkhuizen の生れ、Haarlem で学び、ライデンで臨床を経験した。一七二二年学位獲得(学位論文、“Diss de obstructione”)故郷で十三年間実地医家として研究、一七二五年、Harderwyk 大学教授。一七五四年、息 David と共にエリザベート妃の侍医(ペトルスブルグ)。後、故郷に帰り、一七六二年逝去。

⑨ 原著者

「窮理外科則」の原著は“Praxis medicae systema” Harderew, 1750 である。

ハラー(前出)の刺戟感応説の支持者、わが蘭学に現れる医人のうち、プールハーヴェ、スウィーテンに次で、最もライデン学統の正しい系統の人、「外科則」に現われる医学思想は、その間の事情をよく物語り、終始「纖維学説」から論じた外科書である。「窮理」としたのは、その為めである。そして、本訳本は一七九〇年(第四版)からのものであるから、原著の間には、すでに四十年の歳月を経ており時、代はすでに生氣論の最もよく行れた時代であったが、内容は依然、プールハーヴェの機械論的である。

⑩ ゴルテルの医学思想

しかし、プールハーヴェがそうであったように、ヒポクラテスの自然哲学的のものは、ゴルテルの臨床態度である(彼

の主著) “Medicina Hippocratica. exponeus aphorismos Hippocrates.” Amst., 1741. Padua, 1747. Amst. 1754 (がある)。従つて、その臨床態度は親試実験を基調とする。例えば、現在の體質異常及びアレルギー體質を論じ「変性ノ者トハ、譬ヘハ阿片ヲ用ヒテ睡眠ヲ起サズ、收斂劑ヲ用ヒテ下劑ヲナシ、薔薇花ノ芳香ヲ嗅テ眩暈失氣ヲ發シ、乳汁ヲ用ヒテ毒ヲナシ害ヲ招クニ似タル者有ルガ如シ、医家常々実験スル所ナリ」といい、訳者、涼庭の註と想像される一文が附してある「医臨病、非為実験則有難知者」とある。医学論としてはガレヌスの四液体病理説を採り、「今吾輩取ル所ノ區別ハ、多血性、胆汁性、粘液性、黒胆汁トス」としている。

④ 内 容

人身を流体、凝体、機動に區別する。そして凝体を元質分子、單纖維、複纖維、單膜複膜單韌帶複韌帶、單管複管、前記諸器重複相合し、「内ニ諸液ヲ含保シテ、一己ノ生活ノ用ヲ為ス者ナリ」、とくに單纖維を論じて、理學者の微分、積分の思想を、医家も採るべきだとし、「元質ノ一元ヲ設ケテ、極微一点ヨリ二点ヲ生ジ、点ヲ相累ナリ、相綴リ連球ノ如ク、極微ノ一單纖維ヲ生シ來ル」と論じ、終始、疾病をライデン學統の學說に従つて、纖維聚合病以下十八種の纖維病に分類している。さらに、この纖維を論じ、「解剖者流ノ纖維、或ハ糸線ト名クル者ハ、直ノ單纖維ニハ非ラスシテ、柔カナル長円形ノ微糸ノ如キ者ヲ指シテ稱ス。此單纖維ハ眼力顯微鏡ヲ以エ極メ視ルベシ。其質、許多、至細ノ纖維、錯綜叢束シテ成ノミナラズ、視力極メ難キ至微ノ小管モ夥シク聚リテ成ル者ナリ。人或ハ此小管々指シテ纖維ト認ムル事アリ」そして「此纖維中ニハ上ニ載スル所ノ疾病ヲ發スルノミナラズ、亦其運行知覺ニ因ル疾病ヲモ發ス」。當時の生氣論の医学論とは相違して、このように機械論である。とくに此の纖維を八種類に分けてゐる。これはビシヤの組織分類と同一思想である。とくに第二十四章の「論纖維係意識病」は、さらに「都テ意識ノ器ノ異ナルニ随テ、其發スル疾病モ、其種類少ナカラス」といい、意識も亦、異なる纖維からなる部位によって異り、疾病も、その解剖上の構成組織によって左右されるという。

その他、凝体を膜、脉管、韌帶に分ち、その病理も、「元質ノ分子聚合」の具合や、各オルガンの物理的變常によって

起るとする。後者の変化は最も脉管疾病に特有である。即ち、狹窄、開瀾、室塞、傷裂である。

⑤ 流体論

流体論の血球（血胞を表現する）の大、小、その形態上の変化（或は尖鋭、或は鈍角）は、ブルハーヴェエやスウィーテンの思想と全く同一に發病原因となりうる。又、血液を構成する血球の変化のみならず、血液全体の重量の増減（「血胞重於養液、養液重於水、乃其比例、水一貫目、血一貫零五十六錢」^⑩）、血液合力の強盛、若しくは衰弱（粘稠若しくは稀釈）さらに膨脹、腐敗、洪瀉、粘膠、苛烈、等を挙げて、之が疾病を起すとする。

血液の変態を論じて「^⑪ 医哲蒲児華歌曰、疾ハ凝体トノ間タ抱持、抵抗、其常度ヲ失フニ因テ發スト、是ヲ以テ医学ハ必ス其常ヲ知ヲ以テ要務トス」とし、以下「蒲爾花歌、万病治準」（前出）に現れたと同一論旨を展開している。

⑥ ゴルテルの機械論

最後に精液を論じ「^⑫ 碩学ノ列文貌屈 Leevenhoek（前出）精ノ本質ハ全ク至微ノ活物ナルヲ鏡術ニ由テ發明セリ」として、顕微鏡所見を紹介し、「碩（涼庭）案スルニ窮理医学ニ従事ス、ル者固ヨリ意思ヲ無間ニ容レテ、術ヲ尽シ、物体ノ極微ヲ測リ分子ノ疎密ヲ究メント欲スル者ハ、必ス先ツ一大極ヲ立テ、大小一体、万物一理ノ義ヲ明カニスベシ。然ラザレバ、思惟一途ニ馳セ、拘々乎トシテ末梢ニ趨リ、却テ蒙昧ニ陥リ、雲霧ノ内ニ在カ如シ、天理ヲ明ニシ、事実ニ益ヲ得不能ハス。固ヨリ聖賢ノ学者トスルニ足ラス、蓋シ造化万物ノ形ハ、幽微ニシテ測リ尽スコト能ハズト雖モ、天地自然ノ理ハ、一貫熟識スベキ者ナレバナリ」。この初編の出たのは^⑬ 嘉永庚戌（一八五〇年）で、緒方洪庵の「病学通論」（前出）の上梓された^⑭ 嘉永乙酉（一八四九年）と同時のものである。今、両書を比較して前者は徹底した機械論、後者は全くの生氣論である。このゴルテルを訳した、新宮涼庭を見るとブルハーヴェエの“*Institutiones*”を訳して「万病治準」とし、これを底本として順正書院に医学を講じたのである。その医学思想をこのようにライデン学統から受け、時代的には夫々の原著の刊行から相当の時間的のずれがあるにも拘らず、ライデン学統医学思想を最終期迄奉じた特異な蘭学者である。前記「思惟一途に馳せ」というのは暗に当時の生氣論を指し、以下の一文は、その卒直な批判として意味がある。

⑧ 「窮理外科則」の特徴

「窮理外科則」七篇、創部、上に吉雄永保の序に次で、長崎（今籠町）、菊谷芳満太の附言にも、よく、その思想を表明している。即ち前述の通り、凉庭の説は「論万物一理而事必有法」であり、原著者の護爾徳兒の学説も亦「自身体機活、以至施治条理、悉挹実立法、無不尽其事矣」であり、「此書説理而喻物、其理不在窮理、而專在格物也、読者勿忽焉」とし、又同書、七篇、下の巻尾に現れた長崎興善街の末次幹忠助の跋には、西洋外科が伝来以来、技術を学びながら「不得其理也」、しかし、この書は理と技術とが一体となっているとしている。

このように本書はライデン学統の纖維学説と最も直結した外科書で、ハイステル外科書の主として技術を主体としたものに較べ、多くの医学思想の上から論じた特異な外科書である。

⑨ 訳者新宮凉庭の医学思想

新宮凉庭は、その「療治瑣言」前編上、中、下全四冊
天保壬寅（一八四二）（著者蔵）を見ると、凉庭の長崎滞在中、「蘭舶入港ノ布斂已門人

抜的乙」から、

天保壬寅（一八四二）

（著者蔵）

⑩

ブレンキ

人

で、「瑣言」の中の内科事項には生氣論の「元運」の文字も出てくる。そして、書中、公私歩律屈の著書の中の記事の紹介もあり、内科には当然、当時の生氣論書の技術を採っている。しかし外科に於ては布斂已、^⑩護爾徳兒を支持している。

凉庭は実利的で、順正書院趾に見られる厠の鬼門を無視した建て方や、凉庭の著書中有名な経済書といわれる「破れ家の

つゞく里話」^⑪（著者蔵）に見られる記事は、著しく近代的な思想の持主である。「淫祠ヲ絶ツハ人ノ惑ヲ

上、中、下三冊（著者蔵）

弘化丁未（一八四七）序

⑪

ブレンキ

人

解キ費ヲ除ク善政ナル論」中に病を禱るはまず深く責めるに足らないが、政事などまで神仏に祈念するなどは「笑フベキ

ニ余リアリ」とし、「神仏堂社新ニ出来シテ、人ヲ惑シ国費ヲ益シ、政道ニ害ヲナス事少ナカラズ」と結論している。こ

のように当時としては異例な考え方である。それが果して、ライデン学統の機械的医学論と関係あるや、否やは断定致し

かねる点であるが、「窮理外科則」が明治以後のヨーロッパの近代外科学受容に一礎石となって、大きい寄与をなし得たことは事実である。

引用文献

- ① 「窮理外科則」初編、卷一、二三丁
- ② 同右、上、二丁裏―三丁
- ③ 同右、八丁
- ④ 同右、九丁
- ⑤ 同右、十一丁
- ⑥ 同右、十七丁
- ⑦ 同右、十八丁
- ⑧ 同右、二十四丁
- ⑨ 同右、初篇、卷二、五―六丁
- ⑩ 同右、六―七丁
- ⑪ 同右、二十二―二十三丁
- ⑫ 同右、初編、卷一、二十六―二十七丁
- ⑬ 「療治瑣言」上、十一丁
- ⑭ 同右、上、六丁
- ⑮ 同右、上、二十一丁裏
- ⑯ 同右、中、二十七丁裏
- ⑰ 同右、中、二十九丁
- ⑱ 「破れ家のつゞく里話」中、十七―十八丁

(5) ライデン学統外科からの離脱

「外科必読」

福島都蘭訳
独乙蟄杜満原著

咸宇箕作度未定稿本

⑧ 原著者

福島都蘭訳、独乙、蟄杜満原著、咸宇箕作度未定稿本、「外科必読」^{写本 十二冊}（蔵著者）は“Lehrbuch der Chir. zu Vorlesungen etc”. Leipzig, 1800—02 が原著である。その蘭訳本は“Leerboek der Heelkunde van J.L.A. Tittman.” door A van der Hout, 1827. Amsterdam（京大、江馬本）。原著は二版が一八一〇—一一年に刊行され、三巻、蟄杜満は Johann August Tittman. 1774—1840 のことである。ハノーヴァのビューラに生れ（一七七四年五月二十五日）、エルビングゲローデで薬学の初歩を学び、次で一七九四年以来ドレスデン大学、一七九五年以来ライプツヒ大学に夫々医学を学んだ。学位論文は“De exierentia medica.” 1810 である。（“Tittmannia” という言葉がある。植物好きの平和な家庭のことであり、チットマンが植物についての造詣が深く、植物学に関する多くの論文がある）一八四〇年十月十一日ドレスデンで逝去した。「外科必読」には多くの異本がある。船曳卓堂も「室篤満外科書」があるというも著者は未見である。それ迄の外科が主としてライデン学統のブレンキやゴルテルの旧ウィーン学派外科から採っていたが、ここに再びハイステル時代のドイツ学派医学からの流れを受容することとなる。

⑨ 「外科必読」原著者

チットマンは其他に“Von den topischen Arzneimitteln gegen Augenkrankh.” Dresden, 1804. “Ueber die Vervollkommnung der Arzneimittellehre.” Leipzig u. Dresden. 1806 及び“Chirurg. Verandlehre.” Dresden 1818 など著書があつて、外科書としては史上余り有名でないが、前述の“Lehrbuch d. Chir.”はよく文献を漁り、整然と分類記述され、全篇四十二篇と手術数套を加えている。その訳本は未定訳稿ながら完本である。これは佐伯氏旧蔵本で、他に呉氏旧蔵本からの写本を参考とした。この本については、すでに呉、関場両氏の論考がある。^①之を按ずるに此未定訳稿なるものの原著なるが読過中、ブレンク又はゲッシェル（ゲルケル）ならざるやに考えたが兎に角に、独逸の原著をフウト（福島篤）の蘭訳し

ライデン学派外科と他科との比較(表第十五)

蒲爾花歌、萬病治準 (一七六四) 蒲爾花歌著斯微甸註	和窮理外科則 (一七九〇) 王涅斯、我爾德兒著	外科必読 独乙都、蟹杜満、福島都 訳
誠軒、坪井信道重訳	新宮凉庭重訳 嘉永庚戌	咸字、實作度未定稿
一、血管狹塞ト摩擦 二、刺絡ハ閉塞ト腐敗 三、痲衝必ス哥兒貫ト速脈 四、体温計(五六三)	痲腫(三篇) 一、痲熱痛赤腫、凹陷 指下ニ鼓動ヲ覚ユ。 二、劇者速脈、發熱。 呼吸促迫。 三、別ニ膿癰部(三篇)	痲衝 一冊一、疼痛、赤色、痲腫 二、熱氣。 三、重ニヨルハ四総微ノ輕 ヲチ、特ニ化膿ノ一章ア イム。 四、膿及試験法 (破壞物、造膿物、血球、糞内)
一、元質。 二、單纖維、復纖維。 三、單膜、復膜。 四、韌帶、內臟。 五、諸管總合。	一、元質。 二、單纖維、復纖維。 三、單膜、復膜。 四、韌帶、復韌帶。 五、諸管總合—內臟	第二冊卷頭中「創傷總論」 「蒲氏說」ト同ジク液体思想ヲ認ム。
纖維病 組織ノ物理的結合ノ脆弱、 拘直等ニヨリ起ル。	「單纖維ヲ論ス」以下十九 章ニ亘リ纖維物理的結合ニ ヨリ疾病。	纖維ノ思想ナシ
創液 一、腦ヨリ末梢神經ニ還ル 二、必死創(一〇五一) 三、生創(止血ニテ救命シウ)	必死同 生死創ヲ論ス(七篇七) 生創似之ヲ論ス (七篇八)	記載ナシ 死、不死ノ度ニ準シテ此ニ 記セズ(卷之上、二)
癌 頑硬硬腫癌腫(血行生迫説) 良性腫瘍癰瘤、水瘍 動脈瘤角腫骨腫粘液腫	蟹腫(カンケル)腺ニ固着 (十一節)黒胆、粘汚敗脂着 ヲ一処ニ發、腺中ニアルモノ ヲ除却	乳癌(手術ニヨリ全効ヲ期 鼻癌、舌癌、腎癌、子宮癌 陰囊癌(二十二篇)
腸創	腸管縫合(七篇十四)	横ニ腸ヲ断截シ分チテ兩段 ヲトリ「ロムドオ」法ノ如 ク上端ヲ下端中ニ鉗入、鉗 刺シテ相接合セシメ腸間膜 ニ鉗ヲ突き固定。(狭窄ヲ サケシム)
切開管氣	「西医治要」	截氣喉結喉法(四篇)
肢断	一、螺旋帶(三篇二十九) 二、動脈ヲ蠟糸ヲ鉗ヲ以テ 結紮	「篤鳥兒括多」例用 血管鉗子ヲ以テ鉗シ他部ヲ 一所ニ鈎セサルヨウニスル
丹毒 痲衝ト羅斯ヲ區別	丹毒(ロース)(十篇)	羅斯(異化痲衝)(九篇)

たものと思惟する」とあるが、著者の使用した「外科必読」には明らかに「独乙都、螢杜満選著。咽蘭、福島都訳註」とあって、これから考証して、前記の結果を得た。この訳稿の中には年代の記載がないが、関場氏は名医彙講、巻五から推して、天保十年（一八三九）以後の執筆とされている。

⑥ 内 容

I 概 観

内容については、すでに呉氏の論文^③があるので省略するが、大体に於て、「窮理外科則」とは根本的に、思想も内容も異り、むしろ「瘍科新選」に似ている。

II 炎症論

今、例を焮衝（炎症）にとつて、比較するに、炎症の発呈を、血管の狭窄にとり、血の停滯によって、「其中ニ含有スル所ノ各種ノ物質分レ解ケ去ル」と考へている。即ち、狭窄によって、物理的に血液の鬱積が起り、その結果、物質の分解が起る。そして、その変化の場合は、微細な動静脈間に分布する管網の間だとする。然らば、血管の狭窄は何によって起るかというに、「大氣ノ質、天氣摂生、生意」等、多分に当時の生氣論の影響をうけている。勿論、こうした原因の外に化学的刺戟物（含密様ノ刺戟物）と有機性の毒物（諸種ノ動物ノ毒）、即ち細菌の前段階思想を挙げている。

III 化膿論

化膿の文字は、すでに「瘍科新選」にも出ているので、新しいことではない。しかし、その観察は著しく近代的になりつつある。即ち、とくに試膿法を挙げて、顕微鏡的、化学的に追求している。即ち、化膿をその結論として、炎症によって、自然治癒力と相克し、その結果、化膿の症を呈するものであって、従つて「膿ハ本ト敗腐ノ液ヲ以テ、コレヲ造酸スル者ニ非ス。良善至性ノ液ニ資テ、コレヲ化シ、成ス処ノ者タリ」とする。即ち、化膿は自然治癒力の一過程であつて、「至能アリテ、医療ノ間、闕クヘカラサルノ一流体ナリ」。

しかし、化膿は自然治癒力によって良能の「動運ノ為ス所タリ」ではあるが、そのために発熱、疼痛、緊満があるから、

適当な時期に切開排膿するとす。腐菜（刺^{イビス}必斯）を使うこともあるが割開にしくはない。炎症を論じて、化膿、硬結、死瘡の経過を追っていること「瘍科新選」と同じである。

IV 腫瘍論

次に両書の間「腫瘍」に関する思想はいかに変化したか。

癌は「一種ノ岩毒ト名ルノ奇毒アリテ体中ヲ游走スト是実ニ妄説ナリ」と従来の岩毒説を批判し、癌は局所の疾病であり、其の原因を説明することは非常に困難で、何かの「悪毒ヲ吸入シ腺ニ伝ヘテ、遂ニ全身ヲ汚染」するとする。腫瘍の経過に従って結節状をなすものを暗癌、潰瘍化したものを明癌、最後に翻花癌に移行する。とくに陰囊癌の項に「掃煙膜の癌（スコールステーンハーケルス。カンクル）」と別名を示し、陰囊の襷の間に煙煤の固着することによって起る、煙突掃除人に多いとし、刺戟説をたてているのは特異とする（ポット氏説、後述）。

癌の発生部位に従って鰕腫癌、鼻癌、舌癌、腎癌、胸癌、子宮癌、陰囊癌、肉貌癭瘤（サルコレール）の八種に分けているが、遂に胃癌は見当らない。

しかし、良性腫瘍については「窮理外科則」のような病理がない。主として全身の健康度、不摂生又は内因病の結果生ずるとする。

V 動静脈瘤

動静脈瘤は刺絡の繁用時代から、とくに注意されたので、記載は古く、わが国へも、南蛮、紅毛移行期（前述）にも現れている。本書には瘤をオランダ語訳の「貌癭瘤」で現している。その病因の最初に「動脈ノ本体ニ一種ノ虚衰縦緩ノ伏因」を挙げている。これも生氣論時代の一特徴である。

VI 脱腸

⑥ 脱腸は病理解剖を基盤とした時代に、その治療法が完成したが、この時代には圧定法と徒手整復が主であり、その嵌頓したものの方に観血手術法を実施している。手術に際して陰毛を剃去しているのは新しい所見である。切開して腸を嵌納

せしめてから、ヘルニア囊とヘルニヤ管の閉鎖をしないことである。とくに嵌頓した腸管の壊死に陥り、内容物を漏るものは、手術創に漏口を縫合固定している（後述）。

Ⅶ 創傷総論

創傷総論の中で「死不死ノ度ニ準シテ此区別ヲナス者ハ衛医ノ関カル所ナル故ニ、ココニ其徴を縷述セス」としている。即ち、従来の死、不死の度の記述は法医学上の必要から記載したものとも考えられる。

銃創は「瘍科新選」に較べ、記述詳細であり、その重点は骨傷を伴うもの、諸関節の損傷を伴うもので、断肢は治方として、現今に較べ乱用が甚しい。

Ⅷ 頭部損傷

⑧ 頭部の傷創は外被創、脳蓋骨傷、脳蓋挫創、脳蓋凹没、脳膜損傷、脳膜燬衝、血溢於脳蓋、脳震、脳創に分けて述べている。とくに血溢於脳蓋の項で「若シ証候ヲ徴トナスヘキ者ナク病人半身不遂スル者ハ、其不遂セサル方ノ頭ヲ扨テ鑽蓋（開頭術）ヲ施スヘシ」といい、すでに當時に於ては解剖生理のこの域に達しているのを認める。ただ「体上各部ノ不遂ヲ推シ究テ、其溢血何ノ処ニアルカヲ決定セント欲スル者ハ未タ至論トスルニ足ラス」として脳中枢の定位診断を否定しているが、この記事によって、当時すでに、この定位診断法があった事実を裏書きしている。

さらに脳震の脳実質に形態的变化を認めず、「神経質トセンソリウム sensorium ノ虚衰ニ根シテ発スルカ故ニ、コレヲ治スル間、輕緩ニシテ衝動シ神経ヲ強壮ニシ、裡ニ就テ殊ニ揮発衝動スルノ劑ヲ行ヲ要スヘシ」と生氣論の影響が大きい。

Ⅸ 骨 傷

⑨ 骨の疾病は、本書の特徴として、フランス学派の Pierre-Joseph Desault, 1744—1795 以下の名が最も多く現れることである。鎖骨骨折（鎖骨傷）に、その有名な冠名（デゾー氏）縋帯の紹介である。その他骨、関節の記述は従来の類書に較べ、最も詳細且近代的である。その圧巻は、^⑩ 髕骨頸傷即ち Schenkelhalsbruch の正しい診断である。これに関して、症

状の特徴として十一症を挙げている。大腿の旋廻運動が異常に大きく、その運動時の異常音を記載し、「昭々トシテ両骨相齟齬スルノ声ヲ聴ク」下肢の外旋若しくは内旋等、現行の診断法と略々合致している。

X 手術、手技

⑩ 手術篇又は各章治方に現れた手術について観察するに断扁桃腺法、截気嚤結喉法（気管切開法）、穿心囊法、鑽胸骨法（胸骨穿骨法）、を始め、開腹術（剖腹法）、帝王切開法（剖宮）、碎石法等は従来に見られない詳細な術式の記載がある。とくに四肢切断法（断支）は当時最も繁用されたものだけに、その意義は大きい。

XI 「外科必読」に現れた医学思想

十八世絶ヨーロッパ外科学を以上のような訳本によって受容した。とくに、前述したように、チットマンの訳本「外科必読」は恰度ドイツの生気論時代の所産であつて、その病因論に多少の影響を受けてはいるが、何分技術面が多いので、大した変化は認められなく、むしろ、内科を主体とした当時の生気論者が全くフランス学派に超然の態度をとつたのと反対に、外科のチットマンはデゾー（前述）や Dominique-Jean Larrey, 1776-1842 の名が屢々現れ、フランス学派外科の影響を多くうけている。それだけではなく、イギリス学派の影響も歴然と現れている。例えば碎石術に於て「外科必読」は四つの手術法を挙げている。第一は Celsus（設爾修斯）、これは大きい結石で、肛門から触れるものである。第二は Mariannus（摩里亜紐私）の法である。これも古い方法（一五二四）で、無麻酔で一時間以上を要し、苦痛甚だしい手術である。第三はフランス（弗郎格）法で、現今慣用されている膀胱高位切開術で、恥骨の上から切開して入る方法である。第四は側面から入る法即ち Antoine Louise（ラウ）法である。当時はこの楽胡が最も慣用されていて、膀胱に入ってから「鉗子ノ強クシテ且長キ齒ヲ備フルモノヲ、レイテ其石ヲ碎キ破リ、一々其碎片ヲ検査シテコレヲ取り去ルベシ」、即ちこれはイギリスの有名な William Cheselden, 1688-1752 の "lithotomy" である。

又、癌の項で述べたように、煙突掃除人の陰囊癌の記載は明らかに Percivall Pott, 1714-1789 の "Chimney Sweeps Cancer" として有名なことは外科史にまぎれもないことである。又、笹頓ヘルニアの術式はスペインの Antonio de Gimbernat

のものであり、アヒレス腱の術式もJohr Hunter 1728-1793 が自ら転倒してアヒレス腱を断裂し、その自家経験から創案したという術式である。

このように、「外科必読」は、生気論から、病因論に影響を受けたが、技術面では、フランス、イギリスの諸家の術式を弘く採って、科学的に記載された外科書として、病理解剖を基盤とするものの直前の外科学である。そして当時のヨーロッパの外科的動向をよく伝えた良書である。とくに、「瘍科新選」が簡易全書性格を備えているのに反し、本書は、よく諸家の論を採用し、当時の外科学の趣向を、はっきり示した意義は大きい。

六、「泰西名医彙講」の補遺

「泰西名医彙講」については、今迄多くの報告がある。何れにしても、当時の医学雑誌からの翻訳であることは「泰西名医彙講」凡例に明らかである。主として扶歇蘭土ヒュッランドの医事日記と内外医社会編、賞賜内外医社会著、内外医社翼編、山美福而多氏ホムトの医学雑著等から採っている。フーフェランドは、B. N. G. Schreger や J. Chr. F. Harless と一緒に “Neuesten Annalen der französischen Arzneikunde und Wundarzneikunde” を編輯し、後にこれが、“Journal der ausländischen medicinischen Literatur” として一八〇三年まで続き、一七九五年に “Journal der praktischen Arzneikunde und Wundarzneikunde” となって、フーフェランドの逝去の年、一八三六年まで八二年の長期間刊行された。さらに一八四四年迄続き、フーフェランドの名を冠した Journal として有名である。又、一八〇三年以来 “Bibliothek der praktischen Heilkunde,” として年刊、当時の治療文献を網羅したものである。又ベルリンの Charitekrankenhaus からの年刊臨床症例集の “System der praktischen Heilkunde.” 2Bde 1800—1805 がある。さらに、フーフェランドの Journal を回顧概観しつゝ “Blick auf die Lage der Heilkunst beim Antritt des Jahres 1822” の著もある。このようにフーフェランドのジャーナリストとしての位置を一般に高く評価している。

「医事日記」はその中のどれを採ったものか、判断しにくい。

「山実福而多氏の医学雑著」は Jan Bernard Sandfort, 1745—? の “Heelkundige waarnemingen.” Haag, 1770 (Leyden 1775—1776 もある) であろう。

㉑ 義 肛

「泰西名医彙講」三輯のうちの最も意義のあるのは「腹腿合縫癰潰敗、造賽天肛、同一生於万死録驗」である。すでに人工肛門については義肛（「瘍科新選」、巻之四、二一丁）で述べている。しかし、この録驗（症例報告）は各医彙講の巻之五を挙げて採ったもので、十八世紀末期の腹部外科の実際を知る好資料であることである。壊死して穿孔した、嵌頓腸の上行端と下行端を鑑別する為に牛乳を飲用せしめ、その白色液の穿孔腸管から排出する側を発見したり、本症は第一人に肛門設置後、さらに第二人で肛門をつくり、苦心の末、辛じて救命しえた仔細な報告症例であって、「瘍科新選」その他の訳本では細部の手技を知るべくもなかったのであるだけに、その影響は大きかったものと思惟する。

㉒ 動脈瘤手術とテーデン提出繃帯

「右肘類動脈傷治驗並図」も動脈瘤の摘出術の詳細の報告症例である。その頃慣用された Johann Christian Anton Theden, 1714—1767 の「底電ノ提出繃帯」を、その頃蘭学者の間に大に行れた Gescher（傑詞児）（前出）の “Hedendaagsche oefenende Heelkunde.” Amst., 1781—1786, 3hle. から附図まで採用している。又、当時の止血帯は螺旋のある「豆而尼結多」である。

㉓ 筋性斜頸手術

㉓ 「頭頸歪斜治驗」は筋性斜頸 Caput obstipum musculare の治療を述べている。とくに興味深いのは胸鎖乳頭筋の深淺二層あることを知らず、まず術者は乳嘴突起の外面から起り、柱状になった腱を切断したが、依然斜頸が治らないので「余愕然トシテ心驚キ、手術ノ毫モ其病ヲ治スルニ益ナキヲ覺フ、時ニ乍チ天、華弗ノ經驗ニ此腱ノ外又必ず靱帶狀ノ体ヲ切断ス須キヲ載ルヲ想起シ」して、この靱帶状体を捜し、これを切断して目的を達したと記載している。即ち、深層の腱を切断したのである。深層の腱（鎖骨に附着）の存在についての経緯は、こうした報告症例に於てのみ知ることが出

来る。当時としては貴重な経験である。文中の天、華弗は Gerhard ten Haaff 1720—1791 で、このテン、ハーフの経験を想起して手術に成功した旨の報告症例である。

㊦ その他の手術

㊦ 「奇驗三則」はサンデフォルト Sandifort (前出) から採っている。巨大な頸腫の摘出例、誤嚥鍼 (三十二条) の摘出義膜喉焮衝、以上の報告である。

すでにフーフェランドの Journal についてはドイツ医史学の Diopgen の仕事に尽るが、わが国に親しく、一部が翻訳、刊行されたことの意義は大きい。

引用文献

- ① 関場不二彦「西医学東漸史話」下巻、四二四頁
- ② 同書、四二〇頁
- ③ 同書、四一九—四二四頁
- ④ 「外科必読」第六冊、第二一篇
- ⑤ 同書、第一四篇
- ⑥ 同書、第七冊、第二三篇
- ⑦ 同書、第二冊、卷之二
- ⑧ 同書、第二冊、卷之三、創傷別論第二篇
- ⑨ 同書、卷之下五、第三八篇
- ⑩ 同書、第一一冊、卷之下、第三九篇、骨傷一九章
- ⑪ 同書、第二二冊、附録手術数套
- ⑫ 同書、第三冊、顔創一四章以下

- ⑬ 同書、第六篇腹創、九章、淋石
- ⑭ Zachary Cope : "William Cheselden" 1953
- ⑮ Max Neuburger "Some Relations between British and German Medicine in the first half of the Eighteenth Century Bulletin of the History of Medicine, Vol. XIII pp. 217—228. 1945
- ⑯ W. J. Bishop: "The Early History of Surgery," 1660, pp. 118—120
- ⑰ Leo M. Zimmermann and Ilza Veith: "Great leaders in the history of surgery," 1961 P. 327
- ⑱ Idid., pp. 338—356
- ⑲ 関場、前掲書、下巻、四二六—四二八頁
- ⑳ Karl Sudhoff "Chr. W. Hufeland und die Hufelandische Gesellschaft in Berlin. Dtsch. med. Wschr., 1910 SS 7—17
- ㉑ Walter A.L.V. Brunn : "Med Zeitschriften im 19. Jahrhundert," ss7—17.
- ㉒ "Nieuw Nederl. Biograph" A 17.S.6
- ㉓ 「泰西名医集講」三輯、八冊天保丙申年鐫(著者蔵)卷之五、一一三—一二丁
- ㉔ 同書、卷之二、一二丁—一八丁
- ㉕ 同書卷之三、一—三丁
- ㉖ 同書、卷之三、三一—八丁
- ㉗ V. Brunn, Ibi S. 59

蘭館医デ・ハウトの死について

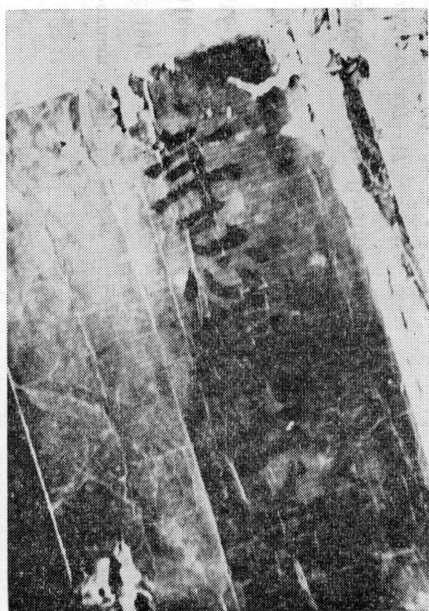
大鳥 蘭 三 郎

The death of a Dutch Factory's doctor, named "de Hout." Ranzaburo Otori

私はさきに、昭和三十八年二月二十三日発行の「医学のあゆみ」第四四巻第八号に「ある蘭医の墓」と題する小文を発表した。そのなかで「蘭館日誌」の一七六八年五月十九日の項に出島のオランダ商館の医師 Jan François de Hout の死が報ぜられており、遺体をその翌日にサカ派 (Sacac gesinte) のシニョダのトジョイン (Sinjoda Tojoen) に葬った、との記載があることを述べておいた。さらに、京都の阿知波五郎博士にその記事のことをお話し、de Hout の墓があるはずであるからそれを探していただきたいとお頼みしたこともつけ加えておいた。

この私の思いがかなえられ、de Hout の死に関するたしかな証拠が阿知波博士の御尽力によって明らかになったので、この間のいきさつを述べて記録にとどめておきたい。

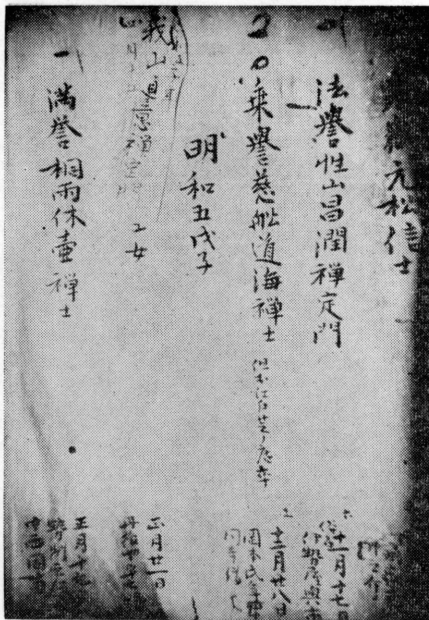
私が阿知波博士にこの件の墓の捜査のことをお願いしたのは、もう四、五年前のことであつたと記憶している。阿知波博士はその後私のこの頼みを忘れられずに種々探索さ



れたが、今年の春になって、私の探し求めている墓は見当
らなかったが、de Houtの名のある寺院の過去帳に見つけ
られたというお手紙をいただいた。

それによれば de Hout の名が記されている過去帳は真
如堂東陽院のもので、その明和五年四月五日の項に de
Hout の名が記されているのを発見された由で、そのうち
その過去帳を複写して送って下さることであった。

私はこの複写々真の送られてくるのを心待ちにしていた
のであるが、去る七月三日の日附で阿知波博士から御手紙
と写真九葉とを御送附頂いた。私信ではあるが、同博士の



御人柄を偲ばせるものが多いと考えるので、その大部分を
つぎに引用させて頂く。

謹啓 真如堂、東陽院の過去帳複写の件、お引受け申し
ながら、長期間怠けまして誠に申訳なく存じます。(尤
も、すでに二回、きくやさんを通じ借り受け、マイクロ
を撮って何れも失敗私はどうも写真はにが手の中のにが
手で)

今度のものは辛うじて判読ができますので、大変出来は
悪く、申訳ありませんが、お寛容下さい。

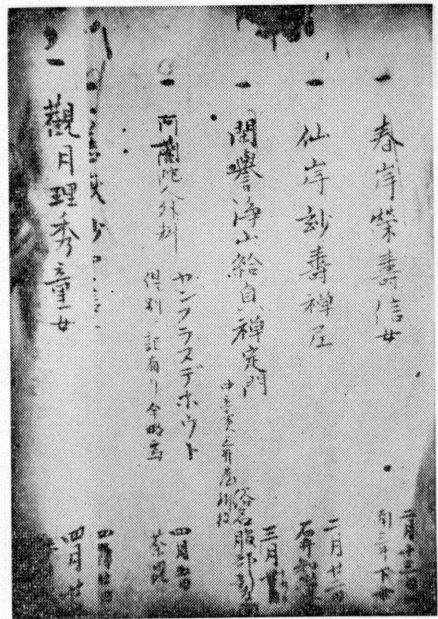
○過去帳の巻二が該当巻です。表紙をとっておきまし
た。

○明和五戊子を明示する為めに、該当頁の前頁を撮りま
した。

○次の頁がヤンフラスデホウトのある四月五日のところ
です。この部は不出来になるといけないので色々の角度
から撮って見ました。

どうも思はしく行きませんが、東陽院さんも、私の写真下
手には、あきれ果てて了って居られました。もし、お気に
召さねば写真屋に東陽院さんまで出張させましょうか。お
返事とお下命をお待ち申上げます。

下略



阿知 波五郎

六月尽日

大島蘭三郎様 侍史

阿知波博士のこの手紙と同時に来た写真九葉のうちから

三葉をえらんでここに掲げた。これ等のものについての説明は右の手紙の文中でなされているので十分であるとは思いますが、念の為に蛇足をつけ加えておく。第一図は真如堂東陽院に保存されている過去帳の巻二の表紙の写真図で「年忌換出巻二」と記されている。第二図は同巻のなかに記されている年号を写したもので、第三図はその年の四月五日

の項の記載を示した写真で、つぎの通りに記されている。

一 阿蘭陀人外科ヤンフラスデホウト 四月五日
但シ別ニ記有リ今略焉 茶毘

明和五年四月五日は太陽暦の一七六八年五月二十日にあたり、「蘭館日誌」の記載と一致する。またここに記されている「但シ別ニ記有リ今略焉」はデ・ホウトの死についてのさらに詳しいことが分るのではないかと考えられるが「別ニ記有リ」ということには余り期待ができそうにもない。

東陽院の記録では茶毘に附したというところまでは明らかであっても、遺体を埋葬し、墓碑をたてたかどうかは必ずしも確実には言い切れない。普通、日本人の場合ならば寺の過去帳に記されている人の墓はその寺の墓地にあるのが通例であるが、デ・ホウトの遺体を葬ったと思われる墓は今のところ見当らない。

参考までにデ・ホウトの事歴について記せば、Jan Frangois de Hout はオランダ西部の Aarlon に生れ、オランダ東インド会社の医員として一七六六年(明和三年)に日本へ渡った。その翌年(明和四年)と翌々年(明和五年)に江戸へ行き、その帰途京都の近くで不幸にも病氣のため死んでいる。

私が長い間さがし求めていた de Hout の墓はこういふわけで未だに発見されず、将来にもちょっと見出される可能性は薄いが、しかしその名が、京都真如堂の達中東陽院の過去帳に明記されていることが判明したのである。ここまで来れば私の年来の願いは半ば以上達せられたわけで、今の私はこの点ではなんともすがすがしい気持ちである。慾を言わして頂ければ、この機会にデ・ホウトの命日にもゆかりの東陽院でその霊をなぐさめてあげたいと思っている。(昭和四十年九月例会講演)

それにしても、阿知波博士の一方ならぬ御力添えがあったればこそ私の宿願がかなえられたわけで、阿知波五郎博士の御厚意に対しここにあらためて深甚の謝意を表する次第である。

Summary

I wrote a short article, "A Tomb of a Certain Dutch Doctor" for "Igaku-no-Ayumi" ("The Course of Medical Science"), No.8, Vol.44, published in February, 1963. In this contribution, I touched upon a record described in "The Dutch Factory Diary"

stating a fact that Jan François de Hout, Dutch Factory physician, died on May 19th, 1768, and buried at

Shinjoda Tojoien on the following day. I asked the readers of my article to help me in finding out his tomb. In the meantime, Doctor Achiwa in Kyoto was good enough to write to me in 1965 that, though his tomb was still unknown, he found out a record in the necrology of Shinnyo-doo Toyoin describing the remains of a Dutch surgeon named Jan François de Hout had been cremated on April 5th (lunar calendar), 1768. Doctor Achiwa promised me in his letter that he would send a copy of the necrology to me as soon as possible. I have received it from the Doctor recently. I wish to take this opportunity to honour Doctor Jan François de Hout's memory by making public this photographic copy. I am sure that the manes of the Dutch surgeon who died in a foreign country in the Far East would be propitiated in so doing.

「日本医史学雑誌」 投稿規定

投稿資格 原則として本会々員に限ります。

原稿形式 日本文の表題、著者名のつぎに、英文表題ローマ字著者名を記し、本文の終りに summary と書いて英文抄録を添える。

原稿枚数 表題、著者名、本文、表、図版等をあわせて三印刷ページ（四百字詰原稿用紙で大体七枚）までは無料で掲載それを越えた分は一印刷ページ当り一五〇〇円の実費を頂く。

校正 なるべく編集部におまかせ下さい。

別刷 投稿者には論文掲載誌を五部無料贈呈するほか、雑誌の該当ページを抜き取り、白紙の表紙をつけたもの拾部を無料進呈します。

特に別刷希望の方には実費を頂いて五十部単位で次表の価格により作製致しますこの場合には表紙に表題、著者名などを印刷します。

部 数	論文の ページ			
	五〇部	一〇〇部	一五〇部	二〇〇部
一頁	二〇〇〇円	二三〇〇円	二五〇〇円	二七〇〇円
二頁	二八〇〇円	三一〇〇円	三三〇〇円	三五〇〇円
三頁	三四〇〇円	三七〇〇円	四〇〇〇円	四三〇〇円
四頁	四〇〇〇円	四三〇〇円	四六〇〇円	四九〇〇円
五頁	四五〇〇円	四八〇〇円	五一〇〇円	五四〇〇円
六頁	四九〇〇円	五二〇〇円	五五〇〇円	五八〇〇円

原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目一ノ一

順天堂大学医学部医史学教授室内

日本医史学会

日本医史学会例会記事

昭和四十一年最初の例会は左記のとおり行なわれた。

日時 二月五日(土) 午後二時—五時

場所 東大医学部中央図書館史料室

講演 一、「南海寄帰伝」にみられる医者について

杉田 暉道氏

一、日本の臨床教育に対する二、三の疑義

(一) ドイツ医学採用についてのフルベッキの証言とその

時代的背景

安芸 基雄氏

出席者(敬称略)

福島 博 高木圭二郎 守屋 博 大島蘭三郎 小川 鼎三

石原 明 久志本常孝 杉田 暉道 岸本 頼子 安芸 基雄

関根 正雄 藤村 英子 佐藤文比古 馬場 明 長門谷洋治

萬年 甫

三月例会は左記のとおり行なわれた。

日時 三月五日(土) 午後二時—五時

場所 東大医学部中央図書館史料室

講演 一、吉川宗元宛前野良沢書状

一、石川大浪筆ヒボクラテス像 片桐 一男氏

一、アラビア医学の東方流伝に関する一資料—

「回々薬方」の紹介

石原 明氏

出席者(敬称略)

片桐 一男 鮫島 近二 馬場 明 大島蘭三郎 新井 正治

小川 鼎三 関根 正雄 高木圭二郎 坂本 恒雄 岸本 頼子

福島 博 石原 明 杉田 暉道 中里 竜瑛 陳 徳本

吉川 康雄

編集後記

本年最初の雑誌をお送りします。本誌も会員各位の御後援によりどうやら正常の軌道に乗ることができた

ような気が致します。しかしまだまだ油断は禁物、今後一層の御助力を願い上げる次第です。

日本医史学会の健全な発展を期する意味で、今まで公けにはしていなかった本誌の投稿規定を掲載しました。投稿者には少し酷だと思えるところもありますが、各位にはよろしくこの規定をお守り下さるようお願い致します。本文に英文抄録をつけることをお忘れならないようにお願い致します。

次号は総会号とする予定です。(蘭)

医家謹告

漢法処方近代化

常用漢方処方のエキス化(錠・散)に成功!

古方・後世方の漢方処方で、現在、医家の常用されるものは、ほとんど製造発売しています。

小太郎漢方エキス剤は……

- 従来、煎剤として投与していた漢方処方を、当社研究所にて真空技術による製剤化を開発し、脱水乾燥して粉末および錠剤としたものです。
 - 配合生薬をオートクレーブにより抽出し、含有成分のすべてと揮発しやすい精油成分を完全回収し、真空減圧乾燥法を行なったものです。
 - 原料生薬の品質管理および製造工程管理は、当社研究所のスタッフにより厳重になされております。
 - 漢方エキス剤は一般薬品と同様に、そのまま分包し、投与することができます。
 - 漢方エキス剤の有効成分は、常に一定に保たれております。
- 従来、漢方薬をご使用なき医家も、簡単に安心してご使用願えます。

常用量	1回	3~6グラム	1日3回
医家向薬価	1日分約12円~15円		

呈 文献・リスト

小太郎漢方製薬株式会社

本社・大阪市東区道修町2 TEL (203) 0084

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 12. No. 2

Apr. 1966

CONTENTS

Original articles

The influence of European Medicine

on Japanese Surgery(3) Goro Achiwa...(2)

On the death of a Dutch Factorys doctor,

named "de Hout"Ronzaburo Ōtori...(66)

News(71)

The Japanese Society of Medical History
c/o Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1, Bunkyo-ku, Tokyo.